
ヨウジョ・ジャパン

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨウジョ・ジャパン

【Nコード】

N9795Y

【作者名】

knigh t

【あらすじ】

勇太は幼馴染の彼女を助け、高い橋の上から落下して行った。
その落ちた先は……

第一節 美の探究（前書き）

どうか怒らないで、生暖かい目で見守ってください。
行ける所までは、毎日更新予定です。
宜しくお願い致します。

第一節 美の探究

彼は、その時熱く語っていた。

「ここに公言しよう。私は美少女が大好きだ！
こら、そこ！ 変態言うな！

良く見てみたまえ、あの完成された美しさを！
つばらな瞳、カモシカのような足。そして、キメ細やかなる美しき
素肌！

どれをとつても完璧ではないか！ あれこそ究極の美だ！」

両手を広げて熱弁している私に、呆れたような視線を向けているの
が若干一名。

「それ、ただ幼いだけじゃない。大体、女性の前でロリを熱く語る
こと自体がおかしいのよ。

この変態！」

「何を言う！ 私は決して変態ではないぞ。万人よりストライクゾ
ーンが広いだけだ！」

そう断言する私に、冷たい視線を送りながら言った。

「へえ……じゃ、オバサンでも良い訳？」

その言葉に、私は大きく溜め息をついた。

「君は何も判っていないな。最近の御姉様方をしつかりと見たまえ、
10歳は軽くサバ読める美しき淑女が何と多い事か！

これこそ日本の美学が発展している証だ！ 十分にストライクでは
ないか」

「あんだ、どんだけゾーンが広いのよ……」
完全に呆れ顔で目をそむけている。

「大は小を兼ねると良く言うではないか。

そもそも美を鑑賞していた私に蹴りを入れてきたのはお前ではない
か！」

ビツと人差し指を向けた。

「そりゃ、デート中に小学生の女の子をガン見してれば誰だって怒るわよ！」

「あれは、私のライフワークだ。偉大なるロマンだ。それを阻害される気持ちがわかるか？」

「わからないわよ……」

私は崩れるように、頭に手を当てた。

「ああ、なんと嘆かわしい……これでは、まるでゴルフに行かせてもらえない父の様ではないか」

「そんなの普通じゃない……」

私はもう一度、ビツと人差し指を向けた。

「なんと！ 君にはルネッサンスの心意気は無いのか！ これは美の探究であり文化なのだ！」

「また適当な話で誤魔化す気ね……」

ここまで来たら、解らせなければ私の気が済まない。おもむろに両手を広げる。

「では、簡単に説明しようではないか。全ては時代なのだ。」

昭和のワカメちゃんルックは、すでに終わりを告げた！

もはや女子高生が偉かった時代は、ルーズソックスと共に過ぎ去ったのだ！

これは新しい時代の到来なのだよ！

これからは小学女子が史上最強の霊長類となり、全世界を駆け巡る！

時代は、そう告げているのだあ！ ふはふはふはふはふはふは！！」

「キモイからやめて……」

彼女はベンチを立つと、そのまま歩き出した。

どうにも、理解してくれないらしい……

仕方なく、私もその後を付いて行つた。

怒ったまま振り向きもせず歩いていった彼女だったが、その時、突然の突風が襲った。

それは、何処の台風かと思うほどに強く身体ごと横に押し流された。
気が付けば、目の前に誰も居ない……
ん？

いったい何処に行った？

橋の影にスカートの裾が見えた。

ような気がした……

だが、考えているヒマは無い。

間髪居れずに私は走った。

危なかった……

あわやと言う所で、その腕を掴む事が出来た。

これは……高い……

下を見れば、自動車やトラックがオマケのミニカーより小さく見える。

あまりの恐怖で、彼女は悲鳴さえ出せない状態のようだ。

こりゃ、落ちたら只じや済まないぞ……

慌てて周囲を見回しても、助けてくれそうな人影は無い。

参ったな……

ただ何で、ここだけ手すりが無いんだよ……

そう、手すりがあれば落ちるはずなど無い。

だが、何故か私達の居る位置だけ綺麗に掴まる物が無かった。

これって、犯罪行為だろ……

うつ……ちよっと待て……これは……マズイぞ……

私も橋から身を乗り出して片手で支えている状態だ。

そしてその柱は意外に太く、指に力を込める事が出来ない。

徐々に滑っていく……

やばい……このままでは二人とも落ちる……

腕力だけで粘っているが、そろそろ限界だ。

仕方が無い……最後の手段だ……

私は残りの力を振り絞り、振り子のように彼女を振った。
いーち、にーい、さん！

渾身の力で彼女を引き付けると、勢いよく橋の上に跳ね上がった。

「お前だけでも生きろ！」

力尽きた私が落下する瞬間、全てがスローモーションのように遅くなった。

ああ、本当にヤバい時はこうなるって聞いた事があるな。

そうか、これで終わりなのか……あつけないものだな……

ん？ 私を見ているのか？

今まで、あんな表情で見られた事なんてあったかな？

おや？ もしかして今すぐカッコイイ？

せめて最後の瞬間だけでも、彼女にカッコ良い所を見せられただけでも良かった。

先立つ不幸は許されないだろうが、これはこれで良い人生だった。

うん、もはや私に悔いは無い。

笑顔で見送る私に、彼女は叫んだ。

「出来る訳ないじゃないバカー！」

落ち行く私に向かって、彼女も一緒に飛び込んできた。

「うわ！ 意味ね……」

第二節 二つ、どう？

「もし……大丈夫ですか？」

ん？

助かったのか？

うお、頭痛て……

思わず頭を手で抑えながら、静かに目を開けてみた。

おお……美少女だ……目の前に美少女がいる。それも人気子役並みにカワイイじゃないか。

こんな美の究極に、一般ピープルが巡り会えるはずも無い。だったら、これは夢なのか？ やはり死んでしまったのか？ 確かに、あの高さから落ちたのだ。死んでいて当然である。そうすると、ここはあの世？

ならば、誰も咎める者は居なかつた。

もう、形振り構っている場合ではない。

これは千載一遇のチャンスである。

せめて、お友達にならなければ！

偉大なる光源氏よ！ 親愛なるナボコフよ！ 今こそ我に力を与えたまえ！

おもわず、前に身を乗り出して美少女の両手を握り締める。

「そこな美しいお嬢さん、ぜひ私と仲良くなつて下さ……」
後頭部に衝撃が走った。

「いいかげんにしなさいよ、この変態！」

どこかで聞いた声だ、妙に懐かしい……

「つてお前、何で居るんだよ！」

「こつちが聞きたいわよ！ 気が付いたらここのよ！ 説明しなさいよ！」

そう言われても、私に解る訳も無い。

しばし首を左右に振り、ゆっくりと周囲を確認する。

「何も、わからん！」

また後頭部に衝撃が走った。

美少女が声を上げた。

「あ、頭にお怪我をされております。私の家に治療できる物があります。どうぞ付いていらしてください」

確かに、私の後頭部から血が出ていた。

まあ、今の所は他に何の当ても無い。私達は大人しく付いて行っ

た。その道中、三人で話しながら歩いてた。

美少女の名前は、マエカラ・キョウコ前唐教子と言うそう

だ。おいおい！ 日本人かよ……

だが、その後の言葉に驚いた。

「私は、教師をしています」

「はい？ 教師？」

この美少女は、何を言っているのだろうか？

何か血迷った？

もしかして、おままごと？ それとも妄想癖？

何だか良く判らないが、この場で変に否定しても仕方ない。

私達も、教子に自己紹介をした。

私の名前は、イマノ・ユウタ今野勇太

そして私の後を追いかけて飛び込んだこの女性は、オйкаケ・ヨウコ幼馴染の笈掛遥子

二人とも同じ学校に通う、ごく普通の高校生だ。

かなりの腐れ縁と言って、語弊は無いだろう。

まあ何となく付き合っているような雰囲気になってデートしたりしているが、

実はお互いにこれといった相手が居ないだけの話である。

まあ、そんな事情は話しても仕方が無いので、

当たり障り無い程度で紹介を終わらせたのは言うまでも無い。

何やら、街らしき雰囲気の所が見えてきた。

教子に案内されて辿り付いた先は、驚く事に美少女が溢れかえった街だ。

なんだよ……ここ……

辺りを見渡しても、大人が異常に少ない。

それどころか、男子も見当たらない。

私にとっては嬉しい話ではあるが、ここまで美少女だらけだと不気味でもある。

さらに、ここまで大量に居ては

美少女のありがたみさえも激減してしまうのは不思議な現象だ。

ここは、一体どうなってるんだ？

その時、遥子が冷たい視線で言ってきた。

「それで、何で私達はこんな所に居るわけ？」

その視線があまりに痛いのが、現状では何も答えようが無い。

「わからん……全く、わからん……」

それに諦めたような溜め息をつく。

「それじゃ、どうにもならないじゃない」

少しでも冷静になれるように、心を落ち着かせる。

「うむ、解っている。この状況は確かに尋常では無い。だが、今やれる事は少ないのも確か。ここは出来るだけ多くの情報を収集するべきだろう」

「それは、そうね……」

私達は、教子に案内されるままに家の中へ入っていった。

ここは、美少女ばかりの国。

その名も、ヨウジヨ国。

そのまんま過ぎて、もはや何も言う事が無い……

ここの人々は、我々のような大人の姿に成長しない種族だ。

私が数人見かけた大人の姿をした人間は、どうも違う種族だそうだと。そして教子は、本当に教師だったようだ。

知らなかったとは言え、失礼な事を考えてしまった……

ちなみに他の国との交流は基本的に少ないそうだが、

ここはそれでも最果てに位置する。

この町を訪れる他の種族は限りなく少ないと教えてくれた。

怪我の治療を済ませた後に、お茶を用意してくれたのでそれを頂きながら私達の事情を話した。

始めは話の内容を理解できなかったようでキョトンとしていたが、ここの事情が全くわからない旨を伝えたと色々教えてくれた。

すぐに問題になりそうと言えば、生活に直接関わる身近な事柄だろう。

どんな話が出てくるのだろうか？ と興味津々に聞いていたのだが、話を聞いていくと不思議なくらいに違和感が無い。

何故か知らないが、私達の常識がかなり通用するようだ。

文字がほとんど一緒ならば、貨幣価値もほぼ同じある。

そして何故か、エンの単位だった。

他の国は、ドルとかユーロになっっているらしい。

気持ちが悪いくらいの一致である。

まさかと思つて現金を見せてもらつと、さすがに同じではなかったが妙に懐かしい。

それは、まるでオモチャである。

どう見ても、子供銀行の紙幣と硬貨なのだ。

全く、ありがたみが無い……

おもわず二人で笑ってしまった。

教子が不思議そうな顔をしているので財布から現金を出して見せると、

「かっこいい！」と感動されてしまった。

まあ、ここでは使えないのだが……

しかし、そうになると教子が日本人のような名前も頷ける。

ここは、感覚的に日本と考へても間違いでは無いだろうと言つ結論にも至つた。

こうなると、今の所は目立って苦勞を伴いそんな事柄は無さそうだが、私達は、ひとまず胸を撫で下ろした。

第三節 なに、それ？

今、全世界が懸念している問題があるらしい。

どうやら海を渡った先の大陸には、

ジョシコーサーと言う恐ろしい生き物が居るといつ。

「女子高生？」私達は目を見合わせた。

私は教子に聞いてみる。

「その女子高生って、どんな生き物だい？　もしかしてこんな？」

遥子に向けた指は、思い切り平手で弾き落とされた。

おもむろに、教子が暗い表情で話し始める。

「実は、私達も見ただ事が無いのです。

勇敢な者達は何人も大陸に向かいましたが、帰って来た者は誰一人

としておりません」

「だが、放って置けば問題は無いんだろ？」

私の言葉に首を振る。

「いえ、そう断定できません。と言うのもジョシコーサーの勢力の

中で

最も恐ろしい存在が生まれ出たと言われています。

私達に伝わる予言が正しければ、いずれ世界は闇に包まれるでしょ

う」

途中の一言に引っかった。

「予言？」

私が問うと、教子は声を低くして語り始めた。

「はい、それは……1999年の夏、サスペンスの帝王が降ってくる……」

船越が降って来てどうするよ……

「そして……逃げよ逃げよオチツイテ逃げよ……と有名な言葉を残しています……」

避難訓練かよ……

「それって、当てになるのか？」

私の問いに、驚いて反論する。

「何をおっしゃいますか！ これは偉大なる予言でございます！」
何だかなあ？ 言う顔をしている私達に、さらに話を続けた。

「古の時代、ノセタラダマスと言う偉大な予言者がおりました」
また、いきなりイカサマ臭いな……

「彼は国王暗殺や大惨事を記した予言書を残しました。

これまでの歴史を見る限り、全て予言通りなのです。

そして最後の章に世界の終末を記した

ハリセンボンと言う予言を残しております」

おいおい……

「他にもホームシックレコードで未来を垣間見たと言う予言者もおりまして、

コモリウタと呼ばれる予言書を残しております。

それによればナマハーゲと言う恐ろしい闇の者が、
フルイゴイネガなる強大な魔法で世界を滅ぼしたと記されていました」

それは、ただの怖い夢だろ……

「我々に伝わる全ての偉大なる予言書が、その復活を示しているのです」

いや……聞けば聞くほどに信憑性が……

「それだけでは、ありません！」

話半分と言った私に、何だか教子がムキになっている。
まるで子供のようだ……

いや……見るからに子供なのだが……

「他の国にも予言や伝承があり、とても共通しています」

ほう……それは気になるな。

「隣の国では、ハリセンボンと同様のハルマキドンと言う予言も存在しているのです」

そう来たか……

「近年、新たにペロンチーノと言う者が世界の終末を予言しました」

まさか、食べ物シリーズじゃないだろうな……

「ウドガー・オイシーという者も未来を見ております」

旬の味ですか……

教子はさらに続きを語ろうとしているので、さすがに私は切り出した。

「いや良く判った、予言は良く判った。もういいよ」

それに、目をキラキラと輝かせて

「やっと、判っていただけましたか？」と聞いてくるので仕方なく私は頷いた。

はい……聞いた私が、悪うございました……

第四節 どうする？

神妙な顔つきで、教子が私達に聞いてきた。

「あの、お二人はこれからどうするおつもりなのですか？」

それは、全く決まっていない。

いや、この状況で何も決めようが無い……

「どうしたもんだらうね……考えてはいるんだけど……」

私が困った顔で言うと、続けて教子が言った。

「もし、お二人さえ宜しければ冒険者になってみてはいかがですか？」

「冒険者？」

「はい。勇敢な者達の行方も判らない上に、それを調査する事も進んでいません。そこで国は冒険者を雇っているのです。」

なるほど、探偵みたいなものか……

「もし、お二人がその道を選ぶのであれば、私にも協力できる事はあります」

協力ね……

確かに、何の後ろ盾も無からう現状でその提案はありがたい。

しかし、どうしたものか……

私は教子に聞いてみた。

「ちよつと遙子と二人で、これからの事を相談していいかな？」

「はい、では私はお茶を入れ替えてきますね。ごゆっくりどうぞ」

教子は、ティーポットを持って部屋を出て行った。

さて、どうしたもんだらうか？

「なあ？ どう思う？」

遙子は、私の問いの答えた。

「いや、久々に笑ったわ。涙出て来たし」

「いや、そういう問題じゃなくてさ……」

思わず眉を顰めた私を見た遙子は、軽い溜め息をついてから言った。

「あれが本当の話かって事？」

「そうそう」

私が頷くと、遥子はどこか遠くを見つめた。

「あたしには、本当に思えないわね」

一呼吸置いてから、私はそれに答えた。

「だよな」……」

おもわず、溜め息が漏れる。

だが1つだけ気になるのは、誰も帰ってきた者が居ないって所だ。
これだけは事実として考えて良いだろう。

「まさか、行く気？」

遥子は、ただでさえ大きい目をさらに大きくして私を見ている。

「ああ、他にする事も思いつかないしなあ……」

私が頼杖をついて嘆くように言くと、遥子も同じように言った。

「確かにそうね、生活基盤が無いのよね、あたし達」

「そうなんだよ……そこが大問題だ……」

小さく頷きながら答えた。

第五節 仕方が無いか……

湯気が立つポットを持って、戻ってきた教子に尋ねてみた。

「それで私達は、まず何をすれば良いんだ？」

「やる気になりましたか？」

何故か教子は、目を輝かせている。

そんなに嬉しいのだろうか？

「まあ、他にやる事が思いつかないしな。君が協力してくれるなら、私達としてはとてもありがたい」

目をキラキラさせて頷いている。

しかし何だ？ この変な違和感は……

「それで、どうやってその大陸に行くんだ？」

私が問うと、教子は話し始めた。

「それには、まずオバ山岳地帯を越えなければいけません」

今度はオバサンかよ……

「オバ帝国は、この大陸では一番に強大な戦力を持っております。

そして入国の際は、あらかじめ力カア殿下の許可をいただくことになります」

嫌だな、それ……

「そしてオバ帝国から、オバ傘下の共和国を横断いたします。」
横断したくないな……

「その先に、オジ三国があります」

オジサンも居るのね……

「オジ三国とは、穏やかな民のマス才族、頑固な事が有名なキギヨウ戦士族、

そして一番社交的なチヨイウル族が集まり1つの国になりました。

その先端にチヨイウル族が所有するパンツェッタ港があります。

そこからなら船が出せると聞いております」

何か知らんが、行く気が無くなって来た……

ちなみに、この世界では我々のような男や女と言う概念は無いらしい。

このヨウジヨ国では基本的に全員が女性で生まれて、状況次第で男性になる場合がある。

そして他には、生まれた時に性別がない種族もいくつかある。

それ等は、出逢った相手次第で男になったり女になったりするそう
だ。

自然の性転換かよ……どっかの魚みたいだな……

だが少なくとも、オジ三国のカップルだけは見たくない気がする……

さて、大陸に渡ったとして……

せめて、目指すべき者くらいは押さえておきたい。

今予言されている恐ろしい者は、フジャ・マンバと呼ばれている
そう
うだ。

確かに、怖そうな名前だ……

多分、それが魔王なのだろう。

だが、恐ろしいのはそれだけではない。

フジャ・マンバにはフジャ・マツチヨと言われる側近がいて、
その直属部隊である親衛隊が強敵らしい。

きつと、筋肉の塊りなのだろうな……

近年、勇者が魔物と戦った古い文献が、オジ三国で発見された
そう
うだ。

教子はその内容が知りたくて、教師の伝手を使って写本を手に入
れ
た。

肝心の内容だが、あまりに長いので聞いているうちに疲れてきた。

まあ、話としては意外に簡単だ。

つまり、平和な世界にダンカイ・ノセダイと言う魔王が率いる軍団
が攻めて来たらしい。

それに勝利したのが、シンジン・ルイ 信神ルイと言う名の勇者だった。

極論ではあるのだが途中の長話は、財布を失くしたただの、ナンパをしたのだと……

私の言い方も悪いかもしれないが、どう聞いてもさほど重要には思えなかった。

だが何故か、割と最近の話に思えてならないのは気のせいだろうか？

それでも、途中で少しはマトモな話もあった。

勇者一行は、コジユウ塔の試練で強力な武器と魔法を手に入れたらしい。

そして、その装備と技が勝利の決め手となったそうだ。

となると、まずはそこを目指すのが妥当な選択だろう。

だが、コジユウ塔の試練と言言葉が激しく気になる……

私達は、すごく嫌な気分に浸りながらも、まずはコジユウ塔を目指す事にした。

教子が、何か書いている。

「何を書いているの？」

私が訪ねると、ジャンっ！ とばかりに書いた紙を見せた。

「これは冒険者になる為の、推薦状及び許可章です。これをお城に持って行って、

魔王討伐と行方不明者の搜索を誓約する書類にサインすれば500万円の援助金が手に入ります。

さらに行方不明者を発見できれば一人当たり300万の報酬が頂けます。

そして私は、これを発行する資格を持っているのです」

私達は、目を丸くして見合わせた。

なんだそれ……いきなり500万って……

何か知らんが、凄い資格じゃないか……

「そんなに貰っちゃって良いの？」

「ええ、何しろ誰も生きて帰ってきた事が無いのです。このくらい当然ですよ」

何か笑顔で、怖い事を言わなかったか？ 今……

第六節 出発してみる？

ああ……出発前から憂鬱だ。

まず、名前が良くない。

何だよ、コジユウ塔って……

教子が、町の外まで一緒に来てくれた。

そして町の外にある道まで出ると、教子が何気に遠くを指差した。

「あれが、コジユウ塔です」

って近っ！

すぐそこじゃないですか、お嬢さん……

と言っても、冷静に見れば一山を超えるくらいはありそうだ。

しかし、山より高い塔とは凄いな。

私は、思わず聞いてみた。

「あれは、誰が作ったの？」

「サクラガ・クレイダを作った、パクチーと言う偉大な建築家と聞いております」

はい……聞いた私が、悪うございました……

私達は、教子に何かを手渡された。

何だ？ これ……

「それは、私達の国では旅の出発の時にお渡しする風習があります。お守りのような物です。」

どうか身に着けていてください
いつ寺？

そこに書いてある寺の名前を見て、二人で噴出してしまった。

「あの……何か、おかしかったですか？」

教子が、不安そうに見ている。

「いや、ごめん。ありがとうね、大事にするよ」

私が言うつと、安心したように笑顔に戻った。

「じゃ、行ってくるわ」

私達が軽く手を振ると、これでもかと言うくらいに手を振り返してくる。

それは、どこの子供だよ……

手の振り合いが三度目に突入した時、遥子が呟いた。

「終わらないわよ、これ……」

「だな……」

これでは、出発できるのかさえも怪しい……

この際、教子の事は放置しておこう……

私達は新たな道を切り開く為に、コジユウ塔へと向かった。

歩きながら遥子に、あの時どうして私の中から飛び込んで来たのか尋ねてみた。

遥子の話によれば、落ちて行く私は何やら眩しい光に包まれていたらしい。

それで、おもわず飛び込んだそうだ。そして死ぬとも思っ居なかつたらしい。

安易だ……あまりに安易だ……

生死を決定する瞬間に、普通は飛び込まないだろう……

その神経だけは理解できない……

「もう、二度と無茶はするなよ……」

私が言うつと

「あんたもね……」

冷たく、あしらわれてしまった。

どのくらい、歩いただろう？

遥子が、バテ始めている。

「少し、休憩するか？」

私が問いかけると、何も言わずに何度も頷いている。
こりゃ、キテルな……

私は休めそうな場所を探すと、そこに遥子を座らせた。

「大丈夫か？」

私の問いかけに、ただ手を上げる。

ダメだこりゃ……今にも死にそうである……

とりあえず、教子が持たせてくれた水筒のお茶を飲ませた。
何気にコジユウ塔を見ると、まだ半分くらいはありそうだが、
しかし、もうすぐ下りになるはずだ。

そうすれば、遥子も何とか付いて来られるだろう。

とりあえず、これは一日がかりになりそうだな……

辺りも暗くなる頃に、ようやく到着した。

目の前まで来ると、その大きさに圧倒されてしまう。

「デカイな……」

私が声を上げると、遥子が不安そうに答えた。

「本当に大きいわね……まさか、これを登るの？」

「そう言う事に……なるだろうな……」

私が言うと、遥子はガツクリと肩を落としていた。

さて、とにかく入らなければどうにもならない。

こんな森の中で野営するよりは、遥かにマシなはずだ。

「まずは、扉を確認しよう……」

私が声をかけながら視線を向けると、その顔はすでにゲッソリしている。

「そうね……」

もはや能面のようなのだが……

大丈夫だろうか？

扉の前まで来ると、一度立ち止まる。

遥子は、私を抜いていった。

「おい！　ちよつと待て！」

私の声に答える事も無く、ユックリと振り返る。

「確認もしないで近寄ったら危ないぞ。すでに試練は始まっているかもしれないし……」

それに、糸の切れたマリオネットのように頭を下げた。

これでは、今日中に登り始めるのは無理そうだな……

「ちよつと待っていてくれ、確認してくる」

何とか立つてはいるが、頭を下げたまま返事が無い……

この中に、休める場所があると良いのだが……

第七節 塔の攻略ね〜……

入り口を慎重に見て回るが、トラップのような物は見当たらない。
だが、油断は出来ない。

私は隅々まで見て回った。

これ以上は、判らないな……入ってみるか……

その扉は、異常に大きい。高さは、3メートル近くあるのではないだろうか？

開くのか？ これ……

試しに扉を押してみると、全く反応しない。

では、引いてみようと思うのだが持つところが無い。

うーん、いきなり難解だぞ……

私が腕を組んで悩んでいると、扉が手前に少し動いた。

「え？ 何で？」

意味不明だ……

だが、これで扉を引けば開けられる事は確かである。
しかし……

私は棒を拾ってきて、扉の隙間へと静かに入れてみた。

その時、突然に巨大な扉が轟音を立てて閉まった。

「やはり、そう来たか……」

挟んだ木が、見事に粉碎している……

危うく、指を持っていかれる所だった……

「ちよつと！ 大丈夫？」

その声に振り返ると、遙子が目を丸くして見ている。

「ああ、大丈夫だ。何か嫌な予感がしたんだ……手を入れて無くて良かったよ」

私が答えると、安心した表情になった。

さて、問題だ……

どうやって開けるべきか……

私が悩んでいると、また馬鹿にしたように扉が少し開く。

こいつは……完全に舐められているな……

私は塔の周囲を腕組みしながら歩き回っている。

別に、暇な訳ではない。

何か使える物は無いだろうか？

私は、周囲を探して回っていた。
ん？

これは、何故置いてあるのだ？

無造作に、ブロックが積んである。

ほう……なるほどね……

私は、とりあえずブロックを3個ほど扉の前まで運んできた。

さてと……

完全に人を舐めきった感じで開いている、扉の隙間にブロックを置いてみる。

やはり、さっきと同じように扉は轟音を立てて閉まった。

だが先ほどと違うのは、ブロック1つ分の隙間を残している事。

私は、そのまま待った。

しばらくすると、扉が動いた。

やはりな……

最初よりもブロック1つ分多く隙間が開いている。

「よし！ こいつは攻略できた！」

私は、さらに3つのブロックを持ってきた。

扉の隙間に1つづつ入れて行くと、やがて扉は人が入れる広さまで開いた。

静かに、扉の中を覗き込む。

「なんだ、これ？」

目に入ってきた内部は、ロウソクが灯っていて妙に明るい。

「誰かいるのか？」

その問いかけに反応は無い。

見渡しても、人影は一切見当たらない……

今度は、そう来たか……

激しく怪しい雰囲気だが、ひとまず入るしか道は無かるう……

「おゝい、塔の中に入るぞ」

私が声をかけると、遙子がとぼとぼ歩いてきた。

塔の扉を入ると、全体を見渡してみる。

落ちてきそうな物は……別段無さそうだな……

続いて床を確認して周る。

落とし穴も……無しと……

うゝん……次は、何で仕掛けてくる気だろうか？

中を歩き回ってみるが、仕掛けらしき反応は無い。

ここが、良いかな……

とりあえず、ここなら外の風にも吹かれないので良いだろう。

遙子をそこに呼ぶと、荷物を置いて座らせた。

「靴も脱いで、出来るだけ楽にしておかないと後で辛いぞ」

遙子はそれに頷いて、言うとおりにした。

ひとまず、このまま遙子が回復するまで休憩だ。

場合によっては、夜明かしも覚悟しなくては……

深夜の気温によっては、ブロックを挟んだ入り口の隙間がかなり痛い。

だが、あれを閉めてしまうという事は、自ら脱出ルートを塞いでし

まうような物。

最低限、それだけは避けたかった。

どのくらい経っただろうか？

いつしか遥子は、私の膝の上で寝息を立てている。

本当に疲れていたようだ……

まあ、慣れない山登りをして来たのだ。致し方が無い。

到着したのが夕方なので、感覚では4時間ほど経過しただろうか？

いずれにしても、ここでは夜中は寒くて寝てられないだろう。

そして幸い、ここの灯りは切れる事が無さそうだ。

攻略は、何時からでも開始できる。

今のうちに、なるべく寝かせて置いてあげよう。

突然の身震いで、目が覚めた……

警戒するように、辺りを見渡してみる。

これは、参った……

どうやら私も、ウトウトしてしまったようだ。

先ほどと比べ、気温が相当に下がってきている。

かなり、夜も更けて来たのだろうか？

「ん？ あたし寝ちゃった？」

遥子も、目が覚めたようだ。

「ああ、5時間くらいは眠れたのかな？」

「え？ そんなに？ ごめん……」

「いや、気にしないでいいって。私も、少し寝ていたよ。

それに、上には何時からでもいけるしね」

遥子は、笑顔を浮かべて頷いた。

さて、これからは地味な戦略になりそうだ。

階段を眺めながら呟いた。

「この先も、気をつけた方が良くかもしれない……」
それに、遥子も頷く。

「さて……ばちばち、出発してみるか……」

私達は身支度を整えると、最初の階段をゆっくり上がって行った。

第八節 塔の攻略ね〜……その2

遥子が、また私の元を離れていく。

「あれは、何？」

私には見えない何かを目指して、ひたすらに歩いて行ってしまう。

「ダメだ！ 行くな！」

私の言葉も虚しく、遥子はあっと言う間に包まれ消えていった……くそ……

私は、おもわず舌打ちをする。

一体どういっつもりだ？

先ほどから、こんな事の連続だった。

まるで、幻覚を見せられているとしか思えない。

今まで何とかして遥子を引き止めていたが、

私から勝手に離れて行く度合いがみるみる多くなっていった。

かく言う私も、何度もありえない物を見せられて全く先に進めないで居た。

そして遥子が居なくなつた瞬間から、幻覚は完全に消えて元の塔に戻っている……

そんなに、私達を引き離したいのか？

実際この塔の仕掛けは相当に卑劣で、

油断すれば腕の一本も持つていかれそうな勢いではあるが、

さすがに殺意までは感じられない。

かなり根性の曲がった奴が仕掛けた事は確実だが、クリアする為の道筋は確かにある。

RPGを少しでもプレイした事があるなら、何とか解決できるレベルだ。

決して、無理ゲーでは無い。

と言う事は、人によって試練の度合いと内容が違う可能性も否定できないな……

こうなれば、それぞれに試練に立ち向かわなければいけない。

少なくとも、遙子はゲームに関して素人では無いはずだ。

私の買ったRPGゲームが、すでに何十本も行方不明になっている。

「いつ返すつもりだ？」と聞いてみたら、

「そのうち、まとめて持つてくるわ」とアツサリ答えやがった。

まあ、私はすでにクリアした物だから大した問題では無いのだが……

ひとまず、あれだけのゲームをクリアしているのなら

この塔の仕掛けなど、屁でもないだろう。

それでも、下手をすれば怪我で済まないのは確か。

私としては、心配でならない……

なんとか頑張ってくれよ、遙子……

私は、ひたすらに謎を解き上へと登って行った。

そう、急がなければならぬ事情がある。

ゲームの定番とまでは行かないが、ここまで来て確信めいた物を感じていた。

この嫌らしいトラップを仕掛ける奴であるなら、

きっと最後の階は二人が一緒でなければクリアが出来ないはず。

少なくとも、奴は完全にゲーム感覚で仕掛けを作っている。

そこまで一人で攻略しなければならぬのなら、最後は尚の事巧みに仕掛けるはず。

さらに他の可能性を考えれば、強敵と戦う羽目になるかもしれない。

それは、いわゆる塔のラスボスだ。

その場合は、一人で勝つ事は不可能である場合がほとんどだ。

ゲーム等では、それと気付かせない為に中ボスを用意している。

またかと思って戦ってみたら、あつという間に全滅する事など良く

ある話だ。

そんなトラップを事前に察知するには、よほどゲーム慣れしていなければ無理だろう。

遙子の性格は、基本的に突撃型だ。

それに、あっさり引つかかる可能性は高い。

もしそんなトラップがこの先にあるのなら、

せめて私が先に行って待って居たいのが心情でもある。

今の私達に、失敗は許されない。

いつものように、リセットボタンは無いのだ。

何かが居る……

私が慎重に様子を伺っていると、奴が声を上げた。

「貴様を待っていたぞ！ 私が最初の守護神だ！」

最初とか紹介しちゃってるよ、コイツ……

わざわざ、私を待っていてくれたとはご丁寧な……

って、どこの糞ゲーだよ……

私が呆れていると、さらに続けた。

「私の名は、ゴハンマ・ダカイ。いざ尋常に勝負だ！」

ボケ老人ですか……

しかし、この展開では戦うしか選択肢は無いだろう。

だが、武器はどうする？

何か無いか？

辺りを見渡しても、これといったものは無い……

これは困った……

ん？

ちよつと待てよ……

あいつ、いざ尋常にって言ってたよな……

そうか！ そう言う事か！

「おい、守護神！」

私が呼ぶと、奴は何か驚いている。

「なんだ！ 何か用か！」

「私は武器を持っていない丸腰だ！ これで尋常に勝負が出来るのか？」

その問いに、奴は言葉に詰まっている。

「同じ条件で戦う事が出来ないのなら、貴様は卑怯者だ！」

ビツと人差し指を向けると、奴は一瞬ビクツとした。

「ならば、貴様に剣をやらう！ それなら同等だろ！」

これは、ありがたい。苦勞せずに、武器が手に入りそうだと。

「その剣で、私が勝てたら良いのだな？」

その言葉に奴は笑みを浮かべると、私の足元に一本の剣が投げられた。

私は、剣を拾う動作を始めながら考えを巡らせてみる。

やはり、中ボスのパターンのようだ……

自己紹介で、最初の守護神とか言ってるし……

そうになると当然、二人目が居るはずだ。

だが、さすがにヒント出し過ぎだろ……

これを仕掛けた奴は、卑劣な割には馬鹿なのか？

私が、スローモーションに一時停止を混ぜたような遅い動作をしていると奴が叫んだ。

「早く拾え！」

何やら、だんだん泣きそうになって来ている……

このまま泣かせてみるのも楽しそうだが、さすがに可哀想か……

いや、ちよつと待てよ……

何で、泣きそうになっているのだ？

今、私は何をしている？

ゲームにしてみれば、規格外な行動か？

規格外か……なるほどねえ……

面白そうだな……

私は剣を拾うと、これ以上無いほどに不気味な笑顔を浮かべて奴に言った。

「私は、この世界を滅ぼそうとしている者だ……」

奴は、え？　と言う顔をしている。

「この剣を渡したが運の尽き！　犬のように死ね！」

自分でさえ言っている意味が良く判らないが、

それに何やら複雑そうな顔をしているので更に続けてみた。

「貴様如きが、この私に勝てると思ったか！　この愚か者めが

！　ふはははははは！」

完全に、奴は引いているようだ。

もうこの際、勢いが大切である。

「さあ、どうする？　私に綿ゴミのように殺されてみたいか！　ぬ

ああはははははは！」

もはや、自分でも全く意味が判らない発言になっている……

さて、そろそろ仕上げと行くか。

私は高笑いを続けたまま奴を凝視すると、そのまま前へ歩みを進めた。

それに、奴は泣きそうになりながら恐れおののく。

「来るな！　うわゝ！　来るなゝ！」

奴が、私を恐れて背中を向けた。

今だ……

私は、一気にダッシュする。

「ウギヤゝ！」

背中から思い切り斬りつけられた奴は、そのまま床に倒れこんだ。

第九節 塔の攻略ねえ……その3

もう、何階分を登ってきただろうか？

すでに数え切れないほど謎を解いてが、

この塔は本当に長い……

息を切らせながら階段を上がり、次のフロアに來ると奴は居た。

「よくぞ來たな、私の名はシュウ・トウ。察しの通り、二人目の守護神だ」

何だか先ほどと、ずいぶん雰囲気が違うな……

隣に置いてある、立派そうな鎧が気になって見ていると奴が言った。

「これが気になるか？ もし私に勝てたなら、この鎧をやるっ」

おや、ずいぶんと氣前が良いな。

きつと、よほどの自信があるのだろう。

しかし、何だか真面目そうな奴だな……

さて、どうしたもんだか……

私は、奴に言った。

「それで、どうやって戦うんだ？」

奴は笑みを浮かべて、それに答える。

「お前は、見たところ戦士に向いているようだ。その剣で戦うが良
い」

やはり真面目だな……

これは、前の奴みたいなハツタリは通用しそうに無い。

そこに、後方へと思い切り弾き飛ばされる私が居た。

「そんな打ち込みでは、私には届かないぞ！ もっと腰を入れる！」
一体、コイツは何だ？

「踏み込みが甘い！」

また私は、剣を弾かれ後へと倒れこむ。

最初から、ずっとこうだ。

どう考えても、稽古を付けられているようにしか思えない。
何を考えているのだ？

だが、奴に勝たなければ先には進めないだろう。

仕方が無い……今は、これに付き合うしか手は無い。

私は気合を入れ直して、奴に打ち込んで行った。

くそ……ダメか……

「何だ？ もう終わりか？ 貴様の力はその程度か？」

私は、すでに息が上がって体力も尽き掛けている。

人を見下した視線に腹が立つが、どうにも勝てる気がしない。
どうすりゃいいのだ？

「まだ判らぬか？ 貴様には、それほどまでに疲れる故を考える頭
は無いのか？」

なんかム力つくが、奴の言う通りだ。

力任せに斬り掛かって、あっさりと受け流されてしまう。

今までで判った事は、効率の悪さだ。

これを改善しなければ、絶対に勝てないだろう。

私は、さらに斬りかかる。

しっかりと……

素早く……

体の回転とバネ……

腰の入った踏み込み。

それ等を意識しながら、ひたすらに斬り込んで行った。
ん？ この感覚か？

剣の、風を切る音が変わった。

疲れて果てているはずの身体が、不思議なくらいに動き始めている。
何とか、奴と打ち合えている……いいぞ……

私にも信じられないほど、流れるような連打が奴に襲い掛かる。

その時、奴の剣が弾き上がった。
今だ……

私は一気に踏み込み、その胸に向かって真横へと剣を振り抜いた。

どのくらいの時間だろう？

一瞬の沈黙は、私にはとても長く感じられた。

「見事だ……」

奴は僅かな笑みを浮かべると、床へと崩れ落ちた。

まさか、勝ったのか？

とても信じられない……

奴を確認すると、すでに息耐えているようだ。

私は大きく溜め息をつく、崩れるように座りこんだ。

そして、両手を天に向かって勢い良く掲げた。

「勝ったぞー！」

第十節 塔の攻略ねえ……その4

一息ついた私は、鎧を手にしてみる。

重さとしては革のライダーズジャケット程度しかないが、作りはシツカリしている。

遠目では白色の鎧かと思っていたが、どうも銀に近い。これが白銀と言う奴だろう。

条件は満たしたのだから、もう私の物だ。

怒られる事は無いはずだ。

試しに、鎧を装備してみた。

予想以上に軽い……

色々とポーズを取ってみるが、その動きを鎧に制限される事が無い。まるで、詠えたようだな……

どれ程の防御力があるのかは知らないが、身軽で居られる事はあるがたい。

何しろ、まだ先は長いのだ……

それからは少し仕掛けの難易度が上がったようだが、

これと言って時間制限も無いので、さほど焦りも感じていない。

良く考えれば、十分に解ける程度だ。

まるで、パズルゲームでもクリアする感覚で上へと進んで行った。

もしや、ここか？

周りの装飾などの作りは同じようだが、

何気にガランとした雰囲気妙に怪しい。

私は慎重に見渡してみるが、これといって何も無い。

そこには、上への階段があるだけだ。

と言う事は、あの階段が問題だ。

下手に進んで、発動されたらたまった物ではない……
とりあえず、ここで待つとするか……

やがて遥子が、息を切らせながら階段を登って来た。

「大丈夫だったか？」

私の問いに、手を上げて答えている。

「やはり、仕掛けの傾向に気付いたんだな？」

「あんたのゲームより全然楽よ、余裕だったわ！」

遥子は、疲れを振り払うように笑顔を見せながら親指を立てた。

「それは良かった」

あれだけのRPGゲームを、貸した甲斐があると言うものだ。

この際、勝手に持つて行った事には触れないでおこう……

さて、ここからが問題だ。

「多分、あの階段を上がると何かが起きると思う」

私が指差すと、それに頷いている。

「すぐに、行けそうか？」

私が聞くと、遥子は思い切り首を振っている。

まあ、予想通りだ。

「だよな……とりあえず、あの辺りで休もう」

見繕っておいた場所で、荷物を下した。

まず、このままで居れば何かに襲われる事は無いだろう。

そして、ここは意外に暖かい。

さらに床はカーペットを敷き詰めたようになっていたので

そのまま座り込んでかなり快適だ。

これなら、一階に居た時よりも遥かにゆっくり休める。

私の予測では、次がラスボスだ。

今のうちに、十分な体力を回復しておくのが最善だろう。

第十一節 塔の攻略ねえ……その5

ふと目が覚めた……

どのくらい寝てしまっただろう？

私が目を覚まそうと身体を動かしていると、遥子も起きたようだ。

「大丈夫か？」

私の声に、笑顔を見せた。

さて、まずは作戦会議だ。

私は、遥子に尋ねてみる。

「ところで、そっちはどんな試練だったんだ？」

それに、遥子は笑顔を見せる。

「実はね、魔法を覚えちゃったのよ」

「すげ！ マジで？」

「かなり強いらしいわよ」

そう答えると、遥子是不敵な笑みを見せた。

ならば、定番のフォーメーションで十分にいけるだろう。

「そしたら私が前衛で攻撃している間、後方から援護してくれるか？」

それに頷いた遥子に、話を続けた。

「もし何か問題が起きたら、その時の判断は任せる。私もなるべく合わせるから、臨機応変に頼むぞ」

遥子は、大きく頷いた。

「さあ、行くか……」

二人で階段を上がろうとすると、それが幻のように消えてしまった。

「来るぞ……」

私達は、辺りを警戒する。

その時、フロアが中心が光り出した。

これまた、お約束だな……

辺りが光に包まれ、その眩さが消えていくと

そこに、奴が現れた。

「私の名は、ヨメイ・ビリー」

こいつ、きつと最悪だろ……

「よくぞ、ここまで辿り着いた。だが、これで終わりだ。覚悟するが良い」

落ち着いた低音ボイスが何だか偉そうだが、その言動が良く似合う巨体だ。

確かに、強そうだ……

さて、どうしたもんだか……

まずは、牽制だ。

「ちなみに覚悟は出来ないが、どうする？」

私が問うと、不敵に微笑んだ。

「無駄だ。私に、それは通用しない」

だよな……

だが、いきなり打ち合いたくは無いのも心情……

まずは、奴の動きを見極めたい。

「ちよつと一発、魔法を撃てるか？」

私が問うと、それに遥子は頷いた。

「行くよ！」

遥子の掛け声に、私は剣を鞘から引き抜く。

その魔法が放たれた瞬間に、私は走った……

「ダメ！　ちよつと待って！」

遥子の叫ぶ声で、その場に停止した。

その意味は、瞬時に理解できた。

魔法が、全く効いていない……

こいつ化け物か？

「これは、参ったな……」

私が呟くと、遥子が言った。

「試してみる、動きがあつたら行つて……」

そのまま詠唱を始めると、ボールを持つように差し出した両手の中に光が溢れ出す。

凄いな……まるで魔法じゃん……

いや……魔法か……

ふと遥子が腰を落とすと、その光が溢れる両手を腰に溜めた。
え？ まさか、そのポーズって……

それを、まるで中国拳法のように前に突き出した。

「破〜！」

いやいや……確かに有名だけどさ……

まるで、爆発でも起きたかのように轟音が響く。
やったか？

その時、低い声が響いた。

「その程度では、私を倒す事は出来ない」
マジっすか……

奴が、こちらに歩みを進めて来た。

ヤバイな……考えている暇は無さそうだ。

もはや、行くしかない……

私は、全力でダッシュした。

甲高い音を立てて、互いの剣が弾け合う。
こりゃ強いわ……

私の攻撃を、余裕の笑みで弾きやがる。
だが、まだ打ち負けている訳ではない。
私は、連続攻撃を続けた。

「どいて！」

後から聞こえた声に、思わず身を屈める。
私の頭上を、白い光が通過する。
その後には続き、さらに連続攻撃を仕掛けていく。

しかし、奴は強い。
いかん……徐々に押され始めている……
くそ……

奴の剣を思い切り弾くと、大きく間合いを取った。

「こりゃ強いな……」

息を荒げながら言つと、遥子が囁いた。

「ねえ？ アイツの目の前で何分くらい耐えられる？」

「ずつと、打ち合ってたか？」

おもわず問い返すと、遥子は頷く。

「そうだな……もって2分か……」

私が答えると、遥子はそれに続けた。

「それじゃ、とにかく耐えて！ あたしが声をかけたら避けてよ！」
それに大きく頷くと、また奴へと斬りかかって行った。

身の毛がよだつほどの剣速が、寸前の所をかすめて行く。

こんな剣に当たったら、ひとたまりも無い。

私はステップを効かせながら奴の死角へと回避するが、
一撃さえまともに与える隙を見出せない。

どこまで強いのだ、こいつは……

もはや、私も何時までもつか判らない……

だが、あと少し……せめて、もう少し……

「どいて！」

突然に聞こえてきた声に、私の身体が反応する。

私が避けたすぐ後には、すでにそれが迫っていた。
恐ろしいほどの衝撃波が、奴に襲いかかる。

それに続くように、私は全力で踏み込んだ。

これで、どうだ……

私が放った突きは、奴の喉元を貫通している。

その剣を、思い切り横へと振り抜くと辺りに血飛沫が舞い上がった。

そして、その巨体は静かに床へと崩れ落ちた。

終わった……

私は、おもわずその場に膝を落とした。

振り向けば、遥子もやはり座り込んでいる。

「はい！ 合格〜！」

ありえないほど間抜けな声が、辺りに響き渡った。

何処からともなく、ひらひらと花吹雪が降ってきている……

「おめでとうございま〜す！ 見事に試練をクリアでございます〜

！ カランカラン」

たった今倒したはずの奴が、目の前で笑顔を浮かべ拍手をしている。

「——はい？」

何が起きたか良く判らないで居ると、

どこから出てきたのか倒したはずの守護神達が笑顔で寄って来て、

私達は首に派手な花のレイを掛けられてしまった。

「何？ これ？ いったい何？」

そんな、遥子の問いは確かに道理である。

あの……状況が……全く見えないんですが……

「さあ、君達もこっちへおいでよ」

ニコやかに呼ばれた先には、いつの間にやら大きなテーブルが置い

てあり、

そこに溢れんばかりの料理やら飲み物が置いてあった。

すでに、どんちゃん騒ぎ状態になっている。

「いや、嬉しいね」

「全くだ！ 久々だからね」

奴等は、笑顔で語り合っている。

何なの？ この騒ぎは……

その光景を見て、遙子も啞然としている。

「おめでとう！ カンパ〜イ！」

グラスを持たされて、乾杯をさせられてしまう……

「ちよつとさ……何が、どうなってるんだよ……」

私の言葉に、奴等は揃って驚いた顔をしている。

その時、ゴハンマ・ダカイが言った。

「あれ？ 聞いてないの？ 君達はたった今、見事に勇者の資格を得たんだよ？」

「はあ？」

私達は、二人で目を合わせた。

話によると、ここは勇者の資質を試す為の塔だそうだ。

数々の謎を解ける思考を持ち、

尚且つ状況次第では突飛な発想で危機を切り抜けられる者が、武器と魔法を得る事が出来る。

そして命が危険に晒された時、互いを信じて戦えるかを判断する為の試練なのだそうだ。

聞けば確かに、その通りの事をしてきた訳だが、あまりに事前情報が無さ過ぎる。

奴等はそんな事は知っていて当然だと言う顔をしているので、

「そんな話は、世間一般には知られていないぞ？」と言ってみたら
ゴハンマ・ダカイが

「え〜！もしかして僕達って忘れ去られているの？」と泣き出してしまった。

だが、気になる事はまだある。

「ところで、あんたら誰？」

私が聞くと、皆が愕然としている。

「まさか、本当に私達を知らないと？」

それに二人揃って頷くと、全員が固まってしまった。

「まさか、そこまで民に忘れ去られているとは……」

ヨメイ・ビリーが、大きく溜め息をつくと話し始めた。

「我々は、神の意思によってこの塔に留まり試練を与えている」
いきなり神っすか……

「民には、我等を記した書が広く渡っていたはずなのだが……」
私は、それに続けた。

「この塔の事は、信神ルイとか言う勇者の書にしか出てなかったが？」

「なんと、あのルイか！　そうか……だが、それも今は懐かしい話だ」

ほう……あの話は、事実だったんだ……

それで話を纏めると、こいつ等は神の使いつて事だよな？

「あんた等に聞きたい事がある」

私が声を上げると、ヨメイ・ビリーは静かに頷いた。

「私達は、何故この世界に居るのだ？　いったい誰の策略だ？」

その質問に、腕を組んで眉をしかめる。そして、しばらく考えてから話し始めた。

「我等はすでに、この塔で現世とは数百年の時を隔てている。

これは予見でしかないが、そこに神の意思が働いているのは確か。

神によって、この世界に遣わされたと考えて良からう」

遣わされたと言われてもなあ……こちらにしてみれば、大迷惑でしかないのだが……

「それで、私達は元の世界に帰れるのか？」

私の問いに、少し間を空けてから答えた。

「それは、我等には判りかねる。申し訳ない……」

謝られちゃったよ……参ったな……ここまで来て、答えは見つからないままか？

「だが、1つだけ……」

ヨメイ・ビリーは人差し指を立てた。

「おぬし達には、神の加護が見える。魔王討伐に成功した時、必ず答えは見つかるだろう」

また、曖昧な……

だが彼等には、それが限界でもあるのだろう。

やはり、行くしか道は無いのか……

いつしか私達はすっかり打ち解けて、謎の宴は丸一日続いた。

やがて祭りの後のような静けさの中で、私達が塔を出る時は訪れた。その時に、ビリーが話し始めた。

「我等は、おぬし達を応援している。だが塔を出れば、もはや二度と会う事も無かるう。」

これは餞別代わりだ、受け取ってくれないか？」

そこには兜や箆手にローブなど、立派な装備が一通り置いてあった。

「こんなに、貰ってしまつて良いの？」

ビリーは、ふと笑顔を浮かべた。

「皆が、おぬし等を気に入ってしまったのだよ。我等には、この程度しか出来る事は無い。」

是非、受け取ってくれ」

遙子と目を見合わせてから、二人で頷いた。

そして、めでたく？

コジユウ塔を攻略した私達は、魔の大陸を目指して歩き始めた。

第十二節 冒険者の視線 蓮の場合

私は、ヨウジヨ国から魔の大陸を目指している。

名前は、チルド・レン知瑠土蓮

攻撃は剣が主だけど、多少の治癒魔法くらいならできるわ。

良く白魔法使いとか言われるけど、本当を言えば魔法はそれほど得意ではないの。

ようやく、オジ三国に到着したわ。

半年の時をかけて、やっとこの街まで辿り着いたの。

オバ帝国の横断は、本当に大変だった……

少し進むたびに変なのに絡まれるし、ジドウソ・ウダンって妙な集団に捕まりそうなるし。

ヨウシエンゲミ要刺怨組って、危ない組織にも付き纏われたわ。

一時は、ホゴダン・タイって人にしつこく追い回されて大変だったの。

オバ傘下の国々も酷かった。

カリア殿下の許可は下りているのに、

ミドリノ・オバ傘下管理局の人達が全然通してくれないの。

「危ないから、横断しちゃダメよ」って理由になって無いわ。

本当に、頭にきちゃう。

ワタリマ・ショウ綿理間将って言う旅の商人の方と出会わなかったら、

絶対にここまで来られなかったわ。

必要ない物も色々と買わされたけど、それは仕方ないわ。

私の隣に居るのは、黒魔法使いの西堂伍翔子セイドウイツ・ショウコ

妙に大げさな名前は、王宮に仕える貴族だからなの。

私の家系は冒険者だから身分は随分と違ったけど、翔子とはとても

仲が良かったわ。

私が冒険者になる事を決めた時も、何も言わずに付いてきてくれた。

当初からの仲間であつて、幼馴染でもあるの。

仲間はもう一人、音子オトコノツラ・イヨ和面伊代ワメンイロつて女の子が居るのだけど、

久々に旧友に会いに行くと言うので町に付いてからは別行動をしているわ。

三人でここまで来たのだけれど、今は翔子と二人。

この町の様子を伺いながら、必要な買い物も済ませる予定なの。

その時、翔子が私に声をかけた。

「ちよつと道具を買ってくるよ。何件か回るから、ここで待ち合わせしよう」

そう言うつと翔子は遠くの人込みに紛れて行つた。

あれから、どのくらい時間が経つたかしら？

待ち合わせ場所に戻つて来てみたけれど、翔子は居ないみたい。それからも待つてみたけど、なかなか帰つてこない。

まだかな？

暇つぶしに何処かに行つてみようかと思つて居ると、翔子が見えた。私が手を振つて呼ぶと、翔子は近づいて来ながら話しかけてきた。

「さつそくで悪いけど、行きたいところがある。さあ行こう」

私は、首を傾げながら聞いてみる。

「え？ 何処に行くの？」

「この先に行かなければいけない所があるんだ。すぐだよ」

そう言うつとすぐに歩いて行つてしまったので仕方なく付いて来たが、もう森の入り口だ。

こんな所に？

翔子は森へと入っていく。

「ねえ、ちよつと。本当にこの先に行く訳？」

「ああ、そうだ……」

何か、おかしい気がする。

「ねえ、やめようよ。この森、なんか嫌な雰囲気だよ」

すると翔子は、いきなり私の腕を掴んで引つ張り始めた。

「いいから来るんだ！」

え？　なんで？　こんな翔子は今まで見た事が無い。絶対に変よ……

「ちよつと……貴方、誰？」

私が抵抗すると、翔子の声色が急に変わった。

「くそ……黙って付いてくれば良いものを……」

え？

さらに驚いた。

翔子の足物で、何かが動き始めている。

何？　いったい何？

振り返った翔子の顔は、もはや元の形を止めていなかった。

それに思わず、悲鳴を上げてしまう。

まるで跳ね上げられるような強い衝撃に襲われると、何かが撒き付いて来る。

「何これ！　気持ち悪い！」

「気持ち悪いだと？　ふざけるな！」

突然怒ったと思うと、数え切れない程の触手に体中を縛り上げられた。

「貴様等、いつも馬鹿にしゃがって！　殺してやる！」

「うう………苦しい……」

その力は激しく、もう声も出ない。意識も遠ざかり始めた。
このままじゃ………殺される………

もうダメかと思ったその時、突然に化け物が奇声を上げた。

何とか目を開けると、化け物が燃え上がっている。

何が………起きたの？

しかし、私には何が起きているか考える余裕も無い。

そのまま意識が消えていった……

痛い…… 誰かが頬を叩いている……

何？

声が聞こえる……

「大丈夫か！」

私は僅かに目を開けると、安心したような表情で呟いた。

「良かった、どうなるかと思った……」

あ、翔子だ……

そうか、助けてくれたんだ……

ぼんやり考えていると、霧に掛かっていたような意識がようやくはつきりしてきた。

「あ、ありがとう」

「怪我は無いか？」

手足を動かしてみると、痛みは無い。

「うん、大丈夫みたい」

私は、ゆつくりと立ち上がった。

その時、翔子が目をそらした。

どうしたんだろう？

「何？ どうしたの？」

翔子は目をそらしたまま、私に指を向ける。

そこに視線を向けてみると……

「キヤー……！！」

そこには、私の小さな胸が見事に肌蹴っていた。

荷物の中から上着を出して着替えていると、翔子が話し始めた。

「あの化け物は、いったい何なんだ？」

「良く解らないけど、翔子だったの」

「え？」

理解できないようで、不思議そうな顔をしている。確かに、説明が難しい。

私は出来る限り、解りやすいように説明した。

「化けていたのか……私に……」

それに頷くと、翔子は眉を顰めた。

「それって、この街に魔物が紛れているという事だよな？」

確かにそうだ。そう聞くと、あれ以外にも居て当たり前前に思えてくる。

「なら伊代は？　大丈夫なのか？」

「嘘……そんな……」

私達は、伊代の向かった先へと急いだ。

第十三節 彼女からの視線 遙子の場合

何かに慌てた少女が、青い顔をして駆け寄ってくる。

「助けてください！　お願いします！」

あら？　こんな子供が、一体どうしたのかしら？

「何があつたの？　助けが必要なの？」

その子が心配になって近づいて行くと、後から肩を掴まれた。

「ん？　何？」

何気に振り向くと、驚くほどに勇太は怖い顔をしていた。

「いいから、下がっている」

そう言くと勇太は前に立ち、普段は絶対に出さない低い声で言った。

「貴様の命を奪うつもりは無い。今のうちに大人しく消えろ」

え？　子供相手に、何を言っているの？

それも、こいつが思いつきり好みそうな美少女なのに……

言われた少女も、オドオドしている。

勇太は、大きく声を荒げて怒鳴りつけた。

「さっさと消えねえと、叩き切るぞ！」

うわっ！　これ、引くわ……

ちよつと不味いんじゃないの？

それじゃ、泣いちゃうわよ？

ほら、震えているし……

だが、その予想は大いに外れて少女は笑い始めた。

え？　何それ？

その笑い声が、まるで変声装置でも使ったように徐々に低音へと変わっていく。

うそっ……

「バレちまつちゃ、しょうがねえ！　無様に死ぬがイイ！」

突然に身体が黒く巨大化すると、まるで大トカゲのような姿に変化した。

それと同時に、一筋の閃光が走った。

「くそ……何故、解った……」

勇太はそれに答える事も無く、剣を収めながら背中を向けて歩き出す。

「行くぞ」

あたし達の後で大トカゲが綺麗に二つに分かれると、その場に崩れ落ちた。

「ねえ？ 何で人間じゃないって解ったの？」

勇太は、僅かに笑みを浮かべる。

「私の、少女を見る目を甘く見るな」

その答えに、何か複雑な気持ちを感じたのは確かだった……

「でも、どういう事なの？ まさか、この街に魔物が紛れ込んでいる訳？」

それに、勇太は少し眉間にシワを寄せて言った。

「ああ……残念だが、そのようだ。」

バレると厄介な事になりそうなので黙っていたが、すでに10人くらいは見かけたよ。

あの姿で魔の大陸を目指しそんな冒険者達を巧みに誘っては、とつと抹殺してしまおうって寸法だろう。臭いは元から断てつてな」

あたしは、呆れながら呟いた。

「ずいぶんと、卑怯ね……」

そんな言葉に、勇太は首を振った。

「いや、そうとも言い切れないぞ？ 敵を滅ばすに卑怯もへったく

れも無いのは真実。

これは立派に兵法だ。

だが、こう言った戦略に長けている所を見ると相当の強敵と見て間違いない。

覚悟だけはしておいた方が良さそうだな」

第十四節 冒険者からの視線2 伊代の場合

嫁いで行つた、幼馴染の親友。

ユウ・レイカ

由宇麗佳と涙の別れをしたのは、もう5年も前の話だ。

今頃はあの子も、良い奥さんになっているはず。

麗佳との久しぶりの再会に、私の心は躍っていた。

待ち合わせの公園で待っていると、麗佳がやってきた。

「久しぶりね、元気？」

相変わらず綺麗な顔立ちに抜群のスタイル、彼女が当時モテタのも素直に頷ける。

私達は軽い挨拶を済ませると、

「じゃ、行こうか」

麗佳が歩き始めた。

「あつ、待つて。今日は仲間と来ているの。あまり時間が無いから、貴方のお家にお邪魔は出来ないわ」

「あら、そうなの……」

とても残念そうな顔を浮かべている。

「じゃ、その代わりに良い場所に案内するわ。景色が良いのよ、そこへ行きましょう」

私は大きく頷くと、麗佳に付いていった。

何か変……

さつきからどんどん森の奥へと歩いて行っている。

森と言つても、坂を上がっている感じも無い。少なくとも山では無さそうだ。

こんな所に……景色が良い場所なんて……

「ねえ、本当にこっちなのか？」

何気に聞いてみたが、返事が無い。

どうしたのだろう？

もう一度声を掛けようとした時、麗佳が突然に振り向くと私に駆け寄って来た。

「え？」

何か変な衝撃があつた気が……

何これ？ お腹に何か刺さっている……

すでに私の足は激しく震え始めている、もう立っている事も出来ない。

おもわず、その場に座り込んだ。

「どうして？ こんな……嘘でしょ？」

その時、何かが私の上を凄い勢いで通り過ぎた。
今のは何？

その物体を確認できないままいると、
しばらくして目の前で変化があつた。

驚く事に、麗佳の首が静かに後へと転がり落ちてしまったのだ。

え？ 彼女が、死んだ？ そんな……

しかし、もう私は声を出す事も出来ない……

その光景を呆然と眺めていると、

頭が無くなつた首から植物のような何かが勢い良く生えてきた。

嘘？ 何？ 何が起きているの？

それはあつという間に麗佳の体を包み込むと、そこにはまるで違う物が現れた。

大きな植物が奇声を上げて不気味に動いている。

その時、植物に真っ直ぐ光が走つたかと思うと、

それは綺麗に二つに分かれて左右に倒れて行つた。

ああ、もうダメ……もう何が起きているのか良く判らない。

「大丈夫？ 貴方しつかりしなさい！ 意識をしつかり持って！」

その声で一瞬我に返つたが、また徐々に目の前が霞んでいく。

「大丈夫、傷は浅いわ！」

「よし！ 刺さつたナイフはそのままだ！ すぐに運ぶぞ！」

身体が突然動いたようだが、もう良く判らない。
そのまま意識は遠くへ消えていった。

第十五節 冒険者からの視線3 伊代の場合、その2

見覚えの無い場所……

ここは……どこ？ いったい、どうなったの？

「あら、気が付いた？ 良かった。この町に医者があつて良かったわ。」

もし無かったら、どうしようかと思つたわよ」

声の方向に視線を向けると、誰かが優しくそうに微笑んでいる。

「いったい、何が？」

「うゝん……説明が難しいんだけどね。簡単に言えば、魔物に襲われたつて所かしら？」

そつえば私、麗佳と一緒に居て……

「麗佳は？！」

起き上がるうとした瞬間に、腹部に激しい痛みが走った。

「ダメよ！ とにかく今は安静！」

あまりの痛みに、されるがまま横になることしか出来なかった。

「誰か、仲間は居るの？」

そつだ……あの子達は大丈夫だろうか？

「私の名前は音子和面伊代……魔の大陸を目指して冒険をしています……」

時折痛みに襲われ、声も途切れながらだが、その女性に仲間の特徴を話した。

「なるほどな……では、私が探しに行つてみよう」

突然反対で低い声が聞こえた。

その聞こえてきた声の主に、女性は何故か冷たい表情を浮かべた。

「あら、戻つたのね。おかえりなさい」

「ほら、頼まれた物だ。全く、お使い係は勘弁して欲しい物だな」

荷物をその女性に渡しながら、その男性は優しくそんな笑顔を浮かべた。

「じゃ、行ってくるよ。きっと向こうも探しているはずだ」

そう言っていると、軽く手を上げて部屋を出来ていった。

「すぐに見つかるわよ」

彼女はまた優しく微笑みかけた。

第十六節 冒険者の視線 4 翔子の場合

見つからない……

「どこだ！ どこへいったんだ？」

私達は必死に伊代を探しているが、一向に見当たらない。

まさか……すでに？ そんな……

その時、低い声が聞こえて来た。

「お前等が、伊代の仲間だな。探す手間が省けた。付いて来てくれ」

「え？ いったい伊代は何処に……」

いや……ちよつと待てよ……

私は、魔法の発動を準備する。

「貴様！ 何者だ！ 今すぐに答えないと只じゃ済まないぞ！」

私が叫ぶと、目の前の男性は大きな溜め息をついてから僅かに笑顔を浮かべた。

「なかなか良い警戒心だ。だが、残念な事に私は魔物ではない。

伊代ってのはお前達の仲間だろう？」

「そうだが……何故判った！」

私が問うと、男性は突然に大笑いを始めた。

「何が可笑的い！」

男性は半端に片手を上げて、笑いを堪えながら言った。

「いや、悪い。だが、あんな大声で名前を叫びながら汗だけで走り回っていたら

誰だって判るだろうよ」

あ……確かに……

気が付けば、周りの人々に思いっきり注目されている。

凄く、恥ずかしい……

私がどうして良いか判らずに居ると、男性が話し始めた。

「ところでお探しの伊代ちゃんだが、怪我をしてあの先の医者に居る。」

会わせたいから、私に付いて来て欲しい。どうだ？ まだ疑うか？」

「まだ、信用はしていないぞ……」

そう言つて睨む私に、男性は笑みを浮かべた。

「ああ、構わんよ」

無防備に振り返ると、ゆつくりと歩き始めた。

その場所は、凄く近い所だった。

こんな近くに……

「おゝい、見つかったぞ」

男性がドアを開けると、向こうから女性の声が聞こえてきた。

「あら、早かったわね」

手招きされて中に入ると、伊代がベッドの上に寝て居る。

私達は駆け寄った。

「大丈夫なのか！」

その時、大きな手に背中を掴まれた。

「怪我人に、いきなり突っ込むな！ 今は絶対安静だ」

そつか……怪我をしていたのか。だが、その掴まれた手にムカついた。

「私は子供じゃない！ その手を離せ！」

急に離された私達は、その場に座り込んでしまった。

「元気が良いのね」

そこに視線を向けると、とても綺麗な女性が優しくそこに微笑んでいた。

「彼女が心配してたわよ。ほら、こっちに来なさい」

私達はベッドの横に呼ばれると、改めて伊代を見る。

「大丈夫か？」

それに、かすれて消えてしまいそうな声で答える

「ああ、お前達こそ無事で良かった」

私と蓮は、渾身の土下座をしていた。

「いいから頭を上げてくれ……」

「いえ、この度はとんでもない失礼を！ 申し訳ございません！」
まさか伊代の、命の恩人だったなんて……

私はあの後、お互いに自己紹介を終えると

伊代に何が起こったのか聞かされた。

そして私達と同じく、ヨウジョ国から来た冒険者だと言う事には本当に驚いた。

さらにもっと驚いたのは、彼等がこの世界の人では無いと言う事だ。もう、何を言っているのか良く判らなかった程だ。

今は何とか理解しているが、それでも信じがたい話であるのは確かである。

遥子さんから聞かされた話によると、

あの時たまたま見かけた麗佳と言う友人の様子がおかしかったので、気付かれないように後を付けて行ったそうだ。

すると伊代と合流して、森へと向かって行ったと言う。

勇太さんが、これは危険だろうと判断して、森まで追いかけて行ったそうだ。

そして案の定、麗佳が魔物になってしまったと……

しかし、まさか突然刺して来るとは思ってた居なかったので、

ナイフの一撃を阻止する事が出来なかったそうだ。

「私達が、もっと早く動いていれば……」と勇太さんに謝られてしまった。

だが今、伊代は生きている。

医者に運んでくれたのも早かったので、命に関わるような大事には至っていない。

それだけでも、本当にありがたい事だ。

それなのに私は、その恩人を攻撃しようなどと……
見る目が無いとは、まさにこの事だ……

私が悔やんで困り果てていると、勇太さんが言った。

「いや、あのくらい警戒して当然の町だ。お前達は間違っではない。忘れる……」

「そう言われましても……」

どうしても罪悪感を拭いきれない私に、勇太さんは頭を抱えたまま私に言った。

「それよりも、お前達も見たんだよな？」

ん？ ああ、あの魔物の事が……

「はい！ それは気持ちの悪い魔物でした。」

あのヌルヌルとした、それはもう色といい艶といい……
蓮が、突然に大きな悲鳴を上げる。

「思いだしちゃったじゃないバカッ！」

私は思いっきり叩かれた。

それに勇太さんは少しだけ笑顔を見せると、またすぐに真顔に戻って続けた。

「問題は、我々が見た魔物が全て違うと言う事だ。」

この町は、すでに侵略されていると言っても過言では無い」

確かにそうだ。話を総合すれば、すでに3体の魔物と遭遇している。もはや、何体いるかなんて想像も付かない。

「ところでお前達、魔物と人間の区別は付くか？」

私達は首を振った。

「そうか……」

勇太さんは腕を組んで考え込んだ。

しばらくすると、また静かに話し始めた。

「私に見えるんだ、魔物が」

え？ マジですか？

「何故、見えるのかは判らない。だが、今はこれしか奴等を見分け

る手段が無い」

改めて魔物が町に居ると聞いても、全く判らないほど上手く化けたその正体を見破るとは凄い事だ。しかし、いったいどうやって？

「お前達、何か心当たりは無いか？」

私に聞かれても、そんな話聞いた事が無い。

「いや、そのような話は今まで聞いた事ありません」

「そうか……」

勇太さんは、また考え込んでしまった。

第十七節 冒険者からの視線 翔子の場合、その2

蓮と遥子さんは伊代に治癒魔法を試みると言う事なので、私は勇太さんと町へ情報収集に行く事にした。

しかし、勇太さんはずいぶんと軽装である。

剣は携えているのだが、これで大丈夫なのだろうか？

私はいつものローブ姿に杖で外へ出ようとすると、いきなり勇太さんに止められた。

なるべく民間人に近い服装にしてくれと言う。

防御面が少し心配ではあるのだが、言われたとおりに着替えた。

まずは何処へ行くのだろうか？

とりあえず、勇太さんの後を付いて行っただ。

ここオジ三国が、一つの国になったのは百年前。

今でこそ他の種族が行き来するようになって穏やかな国となっているが、

それまで種族同士の争いが耐えなかったそう。

実際、まだ内戦が続いている地域も、一部ではあるが確かに存在する。

オジ三国になってからはチヨイワル族の社交性が良く生かされてオバ帝国を始めオバ傘下の国々とも仲は良く、海を渡った周辺各国とも交流が深い。

時にはキギヨウ戦士族が強引に話を進める事もある、マスオ族が話を上手く納めてくる場合もある。

ある意味、見事なチームワークで成り立っている国家だ。

その急激な経済成長で発展した貿易ルートが活発なので様々な人々が行交い、

今ではとても多くの種族が入り混じって生活している。

今年は建国百年祭なので、特に多くの人が集まっているそうだ。大きい人や、綺麗な人。そして何か気持ち悪い人までいる。

私の生まれ育ったヨウジヨ国では、とても信じられない光景だ。

やがて辿り着いたところは、広場のようだ。

座って噴水を見られるように丸くベンチを配置してある。

あれ？

勇太さんは、何故かそのベンチに座ってしまった。

「どうしたんです？」

その問いに、一息ついて手招きをした。

「まあ、ひとまず座ろう。先に作戦会議だ」

私は頷くと、隣に座った。

かなり小さいが、噴水がとても綺麗だ。

冒険を始めてからは、こういう物もゆっくり見ていられなくなってしまった。

見つめていると、とても和む。

その時、腕に何かが当たった。

「おい……」

勇太さんが、小声で突付いて来る。

「なんですか？」

私が顔を見てみると、呟くように言った。

「あそこを見ている。前に座っているのが魔物だ、判るか？」

そう言いながら、ただ漠然と斜め向かいのベンチを見ているようだ。そこに視線を追うように向けると、一人の女性が座って本のような物を読んでいる。

他には、誰も見当たらない。

あれが、そうなのだろうか？

いや、あれは普通の女性だろう……どう見ても、魔物には見えない

……

「いや……普通のお姉さんにしか見えませんが……」

勇太さんは、また軽く一息つく。

「そうか……そこで問題だ」

私の目の前に、3本の指を立てて続けた。

「これは三択問題。これから、どのような行動を起すかについてだ。

1、何故に魔物が見えるのかを解明するべきである。

2、この能力を上手く利用して魔の大陸へ進むべきである。

3、この町を魔物の脅威から救うべきである。さあ、どうする？」

いきなり、この人は……

こんな難しい問題を人に突きつけてくるとは……

「それを選択させて、もし間違っていたらどうなるんです？」

私が聞き返すと、キョトンとしながら勇太さんは言う。

「ん？ その時は、全て君の責任問題になるに決まっているではないか」

マジっすか……

やはり、そんな重大な問題はとも答えられない。

「選べませんよ……そんなの……」

その返答を聞いて、勇太さんは笑っている。

私は少しムツとした。

「まさか、からかったのですか？」

目の前で、手を小さく横に振りながら勇太さんが笑顔で言った。

「いや、まずは君の意見を聞きたいだけだ。私はこの世界で、まだ大した時間を過ごしていない。

つまり私には常識と言う概念が存在しないのだよ。だから一般的な意見を求めているのだ」

常識？ いや、それ以前にもう十分に理論的だと思うのだが……

だが、選択肢としては、そのくらいである事は確かだろう。

私はまた聞き返した。

「勇太さんは、どうしたいんです？」

しばらく黙ってから答えた。

「わからん……全く、わからん……」

おいおい……わからないのかよ……

私が先行きに一抹の不安を抱いていると、さらに続けた。

「魔の大陸は、誰も知らない……」

確かに、そうだ。

「つまり、どの選択にもメリットとデメリットが混在している」

ん？ デメリット？

私が首を傾げているのを確認してから、また話を続けた。

「では、簡単に説明しよう。何を計りに掛けるべきかが問題なのだ。

1の選択。まず魔物が見える事の解明を優先した場合、大陸への攻略は頓挫してしまう。

そしてその間に、もし敵軍が総力を挙げて攻めて来たら、もはや終わりだ。

2の選択。この能力を利用して魔の大陸へ進む選択をした場合、例えばこの町が犠牲になっても、見捨てて先に進むしか出来ない。

そして万が一に私が大陸で死んでしまえば、それは敵陣で丸腰状態と言つこと。

帰還する事も難しいだろう。

3の選択。この町を魔物の脅威から救う選択をした場合、敵本陣へ私達の存在が伝わり魔の大陸へ行く事はさらに困難を極めるはずだ。

そして敵の大軍に攻め込まれる可能性までが大いに跳ね上がる。

ここまでで、何か間違っているか？」

何も間違つては居ない……いや、むしろ只の冒険者がそこまで考えている時点で凄い……

確かに、我々の常識の範囲では無い人のような気がする。

私が首を振ると、さらに続けた。

「そして、ここは最前線でもある。私達が魔物を殺した事によって、この町に居る魔物達には、すでにある程度の情報は行き渡っている

はずだ。

だが、こうして魔物の前に居ても判らないのは唯一の救いだ。この様子だと、まだ奴等に面は割れていないようだ。

しかし、冒険者が奴等のターゲットである事には変わり無い。すでに、のんびりと時間を掛けている余裕は無いだろう」

凄いな……ただ、こうして座っているのも調査だったんだ……

「一体、貴方は何者なんです？」

おもわず口をついた言葉に、勇太さんが答えた。

「私か？ 私は何処にでも居る、美の探究者だ」

いや、そんなの居ないし！

うゝん……よけいに、この人が難解になってしまった……

第十八節 彼女からの視線 遙子の場合、その2

あたし達は、治癒魔法を試みている。

でも、ただの魔法ではないわ。これは新しい実験よ。
名付けて、ダブル魔法！

うーん、あたしってネーミングセンス悪いかしら……

そんな事は、どうでもいいの！

今は集中しなきゃ……

あたし達は、伊代のベッドの左右にそれぞれ立っている。

「いい？ 行くわよ？」

あたしが言つと、蓮は頷いた。

あたしの回復魔法はマニ・キュア。

あ……あたしが付けたんじゃないからね！ 勘違いしないでよね！
ちゃんと、コジウウ塔の試練で覚えたんだから！

まあ、そんな話はどうでもいいわ！

私達は意識を集中すると、それぞれに詠唱を始める。

「貸し物借り物の恵みをこの者に与えし、かしこみかしこみ乞い奉らん。」

ほれゆらゆらとふるべ、ほれゆらゆらとふるべ……」

手を左右に振る度に、白い光が溢れ出して来る。

何か祝詞みたいで恥ずかしいんだけど、

こうしなきゃダメって言うんだから仕方が無いの……

どうせなら、もっとカッコ良くして欲しいもんだわ……

手を左右に振る度に、白い光が溢れ出して来る。

発動のタイミングはしっかり打ち合わせたわ。

準備が出来たらお互いを見る。目が合ったら一緒に頷くの。

その三回目に発動よ。

え？ ラフすぎ？ そんな事ないわよ！

よし、準備が出来た。

蓮を見ると、手から光が溢れ始めている。

もうすぐね……

その時、蓮と目が合った。

お互いを見つめ合いながら、静かに頷き始めた。

1……2……3！

伊代の腹部に、目一杯の魔力を注ぎこむ。

その光は蓮のそれを重なり合い、まるでプリズムのように七色に輝き出した。

何かが振動するような重低音が凄い。

空気を波立たせるような威圧感がビリビリと伝わって来る。

まさか、爆発なんてしないわよね……

光が突然弾ける様に飛び散って、キラキラと舞い降りて来る。

スターダストのような光が静かに消えて行くと、辺りに静寂が戻った。

そのあまりに幻想的な光景に、しばし呆然としてしまった。

その時、伊代が少し唸り声を上げた。

はっ……どうなったの？

慌てて傷口を確認する。

……

どこ？

いくら探しても、傷口が見当たらない。

もしかして、これって……成功？

目の前で起きた事を確信出来ずに居ると、伊代は目を覚ました。何度か激しい瞬きをして、周囲を確認する。

そして、おもむろに起き上がった。

……

こういう時の沈黙は、本当に重い……

「ねえ？　どうなの？」

その重さに耐え切れなかったのは、あたしだけでは無かったようで蓮が先に口を開いた。

「うん、どこも痛くない……」

伊代はしきりに、傷があつた付近を捜している。

「無い……何も無い……」

伊代は、驚きを隠せない表情をしていた。

これは、とんでもない成功よ……

随分と調べたけれど、これまで完全治癒の魔法は存在していないの。

治癒魔法を使つても、傷口や痛みが残つたりするのは当たり前。

酷い時は、効いているのかもわからない事があるそうだわ。

今、目の前に起きた現実とは、この世界の常識を覆したのよ。

「蓮！　伊代！　やったわ！」

私達は三人で抱き合つて、大いに喜んだ。

その時、ドアが少し開いた。

「あのう……ユリの世界にお邪魔だったかな？」

勇太が、申し訳無さそうに隙間から覗いている。

「ええ、邪魔よ！」

冷たく言い放つと、二人はギョツとしてあたしを見た。

「ああ、ごめんね。いつもの会話だから気にしないで……」

何だかあたしの方が、バツが悪くなっちゃったじゃない……

第十九節 大丈夫だろうか……

伊代の回復をひとしきり喜ぶと、私達はひとまず落ち着いた。ひとまず向かい合うように椅子に腰掛けて改めて見ると、ヨウジョ国の出身だけあって、3人ともご多分に漏れず美少女である。

私は、聞いてみたい事があった。

「ところで、ここに来るまでの間に他の冒険者は見たか？」

その問いに、三人は揃って首を振ると蓮が言った。

「いえ、ここまで半年かけて来ましたが冒険者は見ていません」

「はい？ 半年？」

私達は目を丸くして、お互いを見た。

「半年も、いったい何してたの？」

これまでの事情を聞くと、何だか可哀想になってきた。

遥子に視線を向けて囁いた。

「言つて……良いのかな？」

遥子は何も言わずに、気まずそうな顔で首をかしげている。

「だよな……」

「あの？」

翔子が首を傾げて、私に声をかけた。

「どうか、しました？」

うーん、激しく言い難い……

何だか知らんが、罪悪感までが……

遥子は無責任に、肘で私を突付いている。

私は頭を掻きながら、伺いを立てるように言った。

「いや、それが……私達は、ここまで2週間で来ちゃったんだけど

……」

「はあ？」

三人は、目を丸くして驚いた。
固まっている……完全に固まっている……

あ……蓮は、すでに泣き出してしまいそんな表情だ。
こいつ等って……いったい……

ちなみに、ヨウジヨ三人組はコジユウ塔には行っていない。
そこに塔がある事は知っていたが、その内容を知る事は無かった。
コジユウ塔に関する書など、見たことも無いと言いつた。
となると、それまで広まっていたはずの書は何処へ行ってしまった
のだろうか？
全く、謎めいた話だ。

だとすると、ヨウジヨ国の冒険者は弱いのか？
いや、それは否だ。

蓮は回復魔法を使えて、翔子は魔物を焼き殺している。
そして伊代が剣で攻撃すれば、十分なフォーメーションが完成する。
それなりには強いのだろうが、どうしても不安は拭えなかった。
これからは、どんな危険が待ち受けているか判らない。
少なくとも、この美少女達が死ぬところなど見たくも無い。
この先、一緒に居て大丈夫なのだろうか？

一応、帰るように諭してはみたのだが、当然の如く魔の大陸を目
指すと聞かない。

まあ、そうだよな……

試しに、聞くだけは聞いてみよう……

「死ぬかもしれないんだぞ？」

「それは覚悟の上です」

ならば、仕方ないか……

少なくとも、この三人だけで魔の大陸に行かせるよりは一緒の方が
マシだろう……

私は一つ、疑問に思っている事を聞いてみた。

「ところで、友人の麗佳は何処に住んでいるんだ？」

その言葉に、三人はドンヨリと暗い顔で俯いている。軽く溜め息をついてから続けた。

「まだ、死んだと決まった訳では無かろう？　まずは、確認が必要じゃないのか？」

その言葉で、花が咲いたように表情が明るくなる。

全く、こいつ等は……

私達は伊代の友人、麗佳の家に向かっていた。

30分ほど歩いて行くと、木々の隙間から家が見えてきた。

「あそこです」

伊代の後を付いていくと、その全貌が見えた。

玄関先にウッドデッキが組んであって、白い椅子が置いてある。まるで、アメリカ映画に出てきそうな家だ。

ひとまず、門まで辿り着くと様子を伺う。

家の中に、人影は見当たらない。

「ずいぶんと静かだな……」

それに、何か嫌な雰囲気だ……

まずは私一人で、玄関先まで行ってみる。

「誰か居るか？」

ノックハンドルを叩きながら呼んで見るが、何の反応も無い。

試しにノブを回してみると、あっさりと開いた。

二重になっている玄関を開けると、その場で、静かに中を見渡す。ずいぶんと荒らされているな……

さて……どうしたもんだか……

ん？

今の気配は何だ？

私は人差し指を立ててから、手の平を下に向けて合図した。皆は、その場に留まっている。

遙子と翔子を指差して手招きをする。

二人は忍び足で近くまで来た。私は、二人の耳元で囁く。

（攻撃魔法の準備をしてくれ……火はダメだぞ……）

二人は、それに頷いた。

静かに詠唱が始まる。

音を立てないように白い椅子を持って玄関の横まで来ると、二人を見た。

準備が終わり、私を見て頷く。

その時、一気に家の中へ椅子を投げ込んだ。

それに向かって、3体の魔物が一斉に飛び掛かる。

「今だ……」

冷たく言い放つと、奴等はこちらに振り返り啞然としている。

だが、時すでに遅し……

地に足を付ける間も無く、綺麗な白い閃光に包まれていった。

私達は、玄関の前で呆然と立ち尽くしていた。

何故か玄関の中に、美しい景色が広がっている。

「どうするよ、これ……」

その威力は思いのほか強力で、壁はおろか向こうの木々まで吹き飛ばしてしまった。

「いやゝ、思いつきり手加減したんだけどなゝ……」

二人は、首を傾げながら頭を掻いている。

こいつ等、大量破壊兵器かよ……

こうなれば、もう自棄である……

「まあ、やつちまったもんは仕方が無い……麗佳を探そう」
開き直って、搜索を開始した。

居ないな……

いくら探しても、誰も見つからない。

生死を問わず、何も発見できないのは妙だ。
だが、もう他に探す場所は無い。

いつたい、何処へ行ってしまったのだ？

伊代に尋ねた。

「何か心当たりは無いか？」

しばらく考えてから、はっ！　として顔を上げた。

「そういえば、手紙に……確か、外からしか入れない地下があるはずです」

では、行ってみよう。もはや、そこしか考えられない。

その入り口には、嚴重に鍵が掛かっていた。

それを魔法で強引に破壊すると、地下への階段があった。

鍵が掛かっているなら中に敵は居ないと考えて良さそうだが、
念の為に、警戒しつつ降りて行く……

暗い……

これでは、何も見えないな……

そう考えていると、後ろでボツと音が響いて明るくなった。
ん？　何だ？

私達が振り返ると、松明のような物を持って蓮は微笑んだ。

「これは商人の方に売りつけられた物の一つで、ハッカマンと言う
商品だそうです。」

意外な所で役に立つんですね」

また微妙な名前が……

奥が照らされると、何かが見えた。

「誰かいるのか？」

何か唸りにも似た、微かな声が聞こえた。

私達が近づくと、伊代が真っ先に気付いた。

「麗佳！」

間髪居れずに、駆け寄る伊代を制止した。

「ちよつと待て……」

この暗い中、僅かなシルエツトで気付くのは大した物だが、まずは確認だ。

私は、ハツカマンを借りて麗佳を照らす。

「大丈夫だ、魔物じゃない。縄を外そう」

その言葉で、皆が駆け寄った。

「麗佳、大丈夫？」

口の縄が外れると同時に声が響いた。

「奥に家族が！」

その瞬間、私は走った。

目の前に立ち塞がる扉を強引に蹴破ると、その先に二人が縛られていた。

そこに、皆が駆け寄って縄を外した。

「大丈夫！ 無事よ！」

遙子に言葉に、私は大きく息を吐いた。

皆、血色は悪くない……

怪我も無いようなので、胸を撫で下ろした。

伊代の問いかけに笑顔を見せている所を見ると、さほどの消耗では無さそうだ。

拘束されていた時間は比較的にかつたのだろう、ひとまず安心だ。

それにしても、旦那はずいぶんと老けているな……

これが、オジ三国の純血種族か……

どう頑張っても見ても、40代以下にはちよつと……

まるで親子にしか見えないのだが……でも、二人は夫婦なんだよな……

しかし麗佳は、ああ見えて立派に大人だ……

まあヨウジヨ三人組に比べれば、遙かにお姉さんには見えるのだが……うん……

まあ、人の家庭の事情など考えても仕方が無い。

「とりあえず、一階へ行こう」

皆で肩を貸しながら、ゆっくりと階段を登って行った。

私達が階段を登り終えて玄関まで来ると、

「あらま！」

麗佳は一声だけ発すると、目の前に広がる美しい景色を見つめたまま固まっている。

そりゃ驚くわな……

「あの……」

私が遠慮気味に声をかけると、

「きつと魔物の仕業ね！ 絶対に許せないわ！」

あちやう、激しく怒ってるよ……

だが、この流れは黙っていれば……もしや……

何も話を切り出さない私に、皆が冷ややかなる視線を送り続けている……

はい……どうせ、指示した私が悪うございますよ……

麗佳に、小さな声で呟いた。

「いや……それは、私達にも責任が……」

振り返ったそれは、まるで般若の面を思わせた。

だが、すぐに何とも言えない感じの表情に変わって行った。

「そうですか……これほどまでに、戦いは壮絶を極めたのですね……」

……

「いや……それが、大した敵では無く……私達が暴走した結果が……」

……

私が言い返すと、目の前に手の平が差し出された。

「いいえ、もう判っております！」

あの恐ろしい魔物との戦いに見事に勝利し、私達は助けられたので

す！

このくらいの被害はあっても当然！」

いや……何か重大な勘違いを……

「私達の命が助かったのです、感謝してもしきれません。

幸い夫の従兄弟に大工がおりますので、このくらいすぐに修復できます。

どうか、お気になさらないで下さい」

そう言われてしまうと……いいのか？　これで、解決でいいのか？　皆に視線を送ると、仕方ない……と言う顔で頷いている。

何だか、私だけ割り食ってないか？

さすがに罪悪感を拭いきれずに、壁の応急処置を手伝っていた。だが、この選択は大正解だったようだ。

私と一緒に修復作業をする旦那さんから、面白い話を聞いた。

彼は、やはりオジ三国の純血種でキギヨウ戦士族の血筋だそうだ。

ここは、元を正せばキギヨウ戦士族の領地になると言う。確かに純血が居て当然である。

三国は基本的に三角に近い形で領地が分かれているそうだが、マスオ族の領地が二つを切り分けるように飛び出した形になっている。

三国を横断しようとなると、キギヨウ戦士族の領地からマスオ族の領地に一度入って

チヨイワル族の領地へ行くそうだ。

ちなみに、この国では冒険者など基本的に好かれていないそうなので、

港を目指すならば商人に化けた方が良さだろうとアドバイスをくれた。

貿易が栄えたオジ三国には、シンキロードと呼ばれる通商路がある。これを使えば、一本道でパンツェッタ港まで行けるそうだ。

だが、商人は基本的に馬車に荷物を積んで移動するのが普通らしい。警備も相当に厳しいと言う通商路を、五人でそろそろと歩いていけば、

無駄に怪しまれるのは必至だろう。

どうやら、すぐにでも馬車を買う羽目になりそうだ……

第二十節 馬車ね……

ヨウジヨ4人の激しく長い別れを済ますと一度街に戻って、一通りの用事を済ませてから本題に入った。

さて、問題の馬車だ……

少なくとも、安くは無いはず……

さて、どうしたもんだか……

旦那さんに教えて貰った、馬車を売っていると言う店に来てみて驚いた。

値段が書いた札を張って、ずらりと並べてある。

これじゃ、どう見ても中古車屋だ……

だが、看板には

『道端レーシング』と書いてある。

どうして、レース？

何屋だよ、ここ……

とりあえず値段を見てみると、思っていたほど高くは無い。

その値段はまちまちで、50万もあれば350万あって理解に苦しむ。

79万8千とか、半端な数字は辞めて頂きたい物だ……

そして、単位はエンだ。

ヨウジヨ国を超えたら、すぐにでもドル圏内になるだろうと思っていたが、

それは私の勘違いだった。

簡単に言えばエンとドルが逆転した感じで、エンが国際的に幅を利かせているらしい。

必死にドルへの換金方法を尋ねる私に、教子が不思議そうな顔を浮かべていたのも

今では素直に頷ける。

全く、先入観とは恐ろしい物である。

そして語源に関しても同様で、日本語がどこでも通用する。これだけでも、相当に助かっている。

恐れていた事態にならなくて、本当に良かった。

さて、問題の馬車だが、この価格帯なら買えない事は無いだろう。私達だけでも、ヨウジョ国からの冒険者援助金を2人分で1千万貰っているの、ある意味余裕だ。

まあ、まだ肝心の馬も買わなければいけないので、まだ何とも言えないが……

まだ先も長いであろう現状では、少なくとも無駄な出費だけは抑えたい所だ。

とりあえず見て回っていると、ツナギのような服を着た人の良さそうなオッサンが寄って来た。

「何、探してるんだい？」

馬車に決まってるだろ……

まあ、そんな突っ込みはやめておいてオッサンに聞いてみる。

「これって、中古ですか？」

「ああ、ウチのは程度がイイよ！」

また、ありふれた台詞を……

こんな事を言う奴がほど、信用できないものだ……

だが、選ぶ基準が全く判らない。

試しに聞いてみる。

「選ぶポイントって、どこなんです？」

オッサンは、それに問い返してきた。

「ん？ 馬車は始めてかい？」

私が頷くと、オッサンは目を輝かせて話し始めた。

「まず大切なのは、この軸だ。ここが逝っちまったら、もう終わり

だ。

後は、木の状態だな。こんな風にヒビ割れてるのは数週間でアウトだ！」

いや、バラしてどうする……お宅の商品だろ……それ……

だが、このオッサンは意外に使えるそうだ。続けて質問してみた。

「そうすると、お勧めってどんな感じですか？」

もはや、任せておけと言わんばかりの表情だ。

「俺がお勧めするのはコイツだ！ この流れるようなライン！ たまらんね〜！ く〜！」

大丈夫か？ このオッサン……

「そして、この幌を見よ！ どんな雨でも、へっちゃらだぜ！」

確かに、それはありがたいが……

「何故、これを勧めたか判るかい？」

いや、判らん……

私は素直に首を振った。

「だろっ！ あの値段ばかり高い奴は、もっぱらお偉いさんが使うもんさ！」

それに比べて、この追求された機能美！ 競争したって、あんなのには絶対に負けないぜ！」

あんなのって……

「兄ちゃん気に入った！ 今なら、完全保障サービス付きだ！ まあ、コイツなら絶対に壊れないけどな！ もってけ泥棒！」

泥棒って……

だが、悪くない条件だ。

それに、値段も安い。この中で60万は、確かに破格だ。隣にあるボロボロの50万より、遙かにお得に見える。

「じゃ、これ下さい」

あっさりと商談が成立した。

さっきから、女性陣が文句を言っている。

どうやら、そのオッサンの言うお偉いさんが使う馬車の装飾がカワイイとかで、

そちらに目が行っていたようだ。

だが、機能美もまた究極の美である。

この女性達は、そこにロマンを感じる事は無いらしい……

嘆かわしいものだ……

私達はオッサンの紹介で、馬を売っていると言う所に来ている。

どうみても、牧場だな……

あまりに広いので、どこに行けば良いのか悩むほどである。

ようやく人を見つけたので、近づいて行った。

先ほどの店を出発する時、そのオッサンに

ライダー・ショ・ダイ

「雷陀亜書大つて奴を、指名しなきゃダメだぜ！」と言われたので、その人と呼んだ。

「あの……雷陀亜書大さんですか？」

「ああ、いかにも雷陀亜書大だが？ いやゝはっはっは」

黒い革ジャンに、赤いマフラーを首に巻いている。

セシス的には如何なものか思うが、妙に強そうな雰囲気がある。

低音ボイスが妙に渋い、笑顔の素敵なオッサンだ。

道端レーシングで紹介された旨を伝えると、突然に視線が鋭くなった。

「なに？ おやっさんが？」

何故に両手を水平に広げて、首を左右へと揺らしているのかは不明だ……

「まあ、来たまえ」

案内された場所には、広大な土地が広がっていた。

大さんは、おもむろに腰に手を当てる。

「どうだ？ 自然は最高だろう。まず、空気が美味しい！
最高じゃないか。いや、はっはっは」

謎めいた自己完結の後に甲高い指笛を吹くと、一頭の白馬が走ってきた。

「これが私の愛馬、サイクロン号だ」

「はあ、なるほど……」

とりあえず頷くと、とても低い声で説明を始めた。

「馬って奴はね、この足が大事なんだよね。筋肉とのバランス
って奴がね」

その時、背後から女性の声が聞こえた。

「また、要らないウンチクを語っている訳？」

「出たな、祥華^{ショウワカ}！」

また両腕を水平に広げている……この人のポーズなのだろうか……

すると大さんが、私達を思いだしたように見ると話し始めた。

「ああ、君達すまないね。これは、渥野祥華^{アキノ・ショウワカ}と言ってね。」

世界征服を狙っているんだね」

「狙ってないわよ！ ただアンタが私に勝てないだけでしょ？」

「なんだとう？」

何やら、喧嘩でも始まりそうなので間に割って入る。

「まあ、落ち着いてください……」

話によると、どうやら毎年馬車のレースが行われているらしい。
そのメインレースで、3年連続優勝をしているのが祥華さんだそう
だ。

そして大さんは、万年2位と言う屈辱を受けているのだと言う。
2位じゃダメなんでしょうか？ と言う突っ込みはやめておこう……

問題は、サイクロン号の足にあると言う。

レースに出場する事自体は問題なく、大さんの管理も行き届いているので

万全の状態だそうだが、

何やら足に故障を抱えているらしく無理な走りは出来ないそうだ。

「サイクロン号の実力は、こんな物ではない！」と悔しそうに拳を握り締めていた。

何か、出来ないだろうか？

いや、深入りするつもりは毛頭無いのだが、関わってしまったからには見ていられない。

私は、遥子に尋ねてみた。

「なあ？ あの回復魔法って、馬に効かないの？」

それに、はっ！ としたような顔を浮かべて蓮を見た。

「いけるよね！ それ！」

遥子と蓮は、サイクロン号の横に立っている。

これから、魔法が発動だ。

さて、どうなることやら……

七色の光が綺麗に弾け飛ぶと、二人は大きく息をついた。

「大さん、いかがでしょうか？」

遥子が声をかけると、大さんがサイクロン号を慎重に確認した。

「こ……これは……ちょっと、いいかな……」

大さんが舞うように馬に跨ると、サイクロン号は驚くような速度で走り出した。

「はいやー！ はいやー！」

威勢の良い掛け声と共に、馬とは思えない旋回をすると、さらなる急加速をしている。

凄いな……これが、本来のサイクロン号か……

やがて、大さんが戻ってきた。

「ありがとう！ いやー、本当にありがとう！ 君達には、心から感謝する！」

慢心の笑顔を見せてくれた。

そして、突然に視線が鋭くなり横を見た。

「祥華！ 今年こそは負けないぞ！」

「ええ、受けて立つわ」

祥華さんも、それに答えた。

不敵に笑い続ける二人の間には、何やら黒いオーラが立ち込めていた。

私達は、厩舎に呼ばれた。

大さんが、神妙な顔付きで座っている。

何か、嫌な予感がするな……

私が声をかけると、大さんは口を開いた。

「君達は、一体何者なんだ？」

そう来たか……

確かに、妥当な質問だな……

まあ、ここまで来たら言うしかあるまい。

ふと遥子を見ると、私に頷いた。

一つ大きく息をはいて心を落ち着けてから、大さんに視線を戻して話した。

「私達は、魔の大陸を目指す冒険者です。

いずれは魔王を倒し、世界に平和を取り戻したいと願っております」私の言葉に、大さんは唸った。

「そうか……魔王か……私も、風の噂には聞いた事がある。だが、君達を見る限り

どうやら噂ではなく真実のようだ。私も平和を願う者の一人、協力させてくれないか？」

ありがたい申し出だが、そこまで甘えてしまつて良いのだろうか？ 顔を見合わせて返答に困っていると、大さんは続けた。

「これまでサイクロン号は、どんな治療も効果が無かった。

これは私の感謝の気持ちだ。ぜひ受け取ってくれたまえ」

誰かが、馬を二頭引つ張ってきた。

「彼は、^{フェイス・リー}部居巢リー！ 私達が改造……いや、彼の馬を見る目は間違いない。

何でも聞いてくれたまえ」

大さんが手を向けると、深くお辞儀をしてから言った。

「この馬は、これまで大切に育て上げた極上の二頭です。どうか大切にしてください」

リーさんは、もう一度深くお辞儀をした。

それに恐縮した私達も、深くお辞儀をするとリーさんが続けた。

「馬車を操った経験は、おありですか？」

私達は顔を見合わせるが、どうやら誰も走らせた経験が無いようだ。「すみません、教えてください」

リーさんは、笑顔で頷いた。

ひととおり指南を受けた私達だったが、

どうやら私以外はまともに操作出来なさそうだ……

まあ、嫌いでは無いから構わないが……

馬車の操作も何とか板についてきた頃、大さんは私が買った馬車を運んで来てくれた。

「おやつさんの所に、野暮用があつてね。いやゝはっはっ」と低い声で笑っていた。

リーさんに手伝って貰いながら出発の準備を整えていると、大さんが私の前に立ちはだかった。

「魔王を倒したら、是非ここを訪ねてくれ！」

笑顔で、ガシッ！ と肩を掴まれた。

「ありがとうございます。その時は、必ずお伺いします」

私達は、固い握手を交わした。

そして、無事に馬車を手に入れた私達は
パンツエッタ港を目指して出発した。

第二十一節 情報だよね……

ここは、パンツエツタ港。

リーさんに教えてもらった、商人ご用達の厩舎に馬車を預けた私達は町に訪れていた。

今は百年祭のイベントで、昼間から花火が上がり、港町は人で入り乱れて活気溢れている。

こんな所で、はぐれでもしたら大変だ。

「どうするよ？ これじゃ、迷子が出るぞ？」

それに、翔子は怒り始める。

「私は子供じゃない！」

「いや、これじゃ誰でも迷子になるって……」

何かの時の為に、待ち合わせ場所を決めないか？」

「それでは、あそこは如何です？」

翔子が指を向けた先には、巨大な建物がある。

何やら、激しく記憶にある形なのだが……

「あれはサクラガ・クレイダと言って、有名な大聖堂です。作者は

偉大なる建築家の……」

その口元に、手の平を向けて首を振る。

「皆まで言わなくて良い……」

それに、不思議そうに首を傾げる。

「あれを、ご存知なのですか？」

「どうせ、未完成なんだろ？」

「え？ 良くご存知で……」

ここまでくれば、予想が付くって……

私達は、魔の大陸へ行く船を捜していた。

とりあえず、偉そうな服を着た船乗りに聞いてみる。

「魔の大陸まで行く船を捜しているんですが……」

「ああ、今は無理だよ!」

あつさり言いやがった……

「え? なんで?」

私が問うと、困り顔で言った。

「今は、どうしても無理なんだよ。どの船も、あそこには行かないだろうさ」

「何とか、船を出せる方法はないのですか?」

遙子が尋ねると、大きく溜め息をついて話した。

「ああ、悪いな。だが国家命令とかで、本当に出せないんだ。俺達も商売上がったりさ」

両手を半端に宙へ浮かせると、呆れたように繭を上げた。

船乗りの話によれば、

「魔の大陸付近の海域には、一切入ってはならない」などと言う命令が

突然に下ったそうさ。

それを無視すれば、船も資格も没収されてしまうと言う。

そして、その規制が解かれる気配は今の所無い。

「そんな無茶な条件で、わざわざ行く馬鹿は居ないだろうよ」と呆れ顔で言っていた。

これは困った……

船が無ければ、先に進めない。

さて、どうしたもんか……

とにかく、このままではどうにもならないのは確か。

行き当たりばったりでも、動き出さなければ始まらない。

何か策は無いものかと、情報集めを開始した。

私達は、酒場に行ってみる事にした。

やはり、情報と言えば酒場である。

といつても、それはゲームの話なのだが……

だが、人々の交流が多いこの街ならば行って見て損は無いだろう。

見るからにショットバーのような店の看板には、

Berタリアンと書いてある。

おいおい……変なの居ないだろうな……

まあ、この際どうでも良い。入ってみよう……

店に入ってみると、まずまずの客入りでそれなりに賑わっている。

テーブル席は一杯なのでカウンターに並んで座ってみると、

三人組が揃ってミルクを頼み始めた。

「あ……あたしもミルク……」

どうやら遙子も、ミルク連呼に釣られたようだ……

ミルクねえ……

マスターに聞いてみた。

「他に、アルコールの入っていない飲み物ってあるの？」

「お前、頭大丈夫か？　ここは酒場だぞ？」

確かにその通りだが、何かム力つくな……

「だが、何故か置いてある！　こう言うの好きそうだろ？　ほれ！」

あるなら最初から出せよ……

炭酸飲料のような物を飲みながら、話を聞けそうな客を見定めていると、

ざわめく店内の後から妙に目立つ声が聞こえてきた。

「その時でやす！　あっしが振りかざした剣が、守護神を一刀両断！」

ん？　守護神だと？

耳を澄まして話を聞いていると、やはりコジユウ塔の事のようにだ。

何故、奴が知っている？

これは、話を聞いてみるしかない。何かしらの情報は、必ず持っているはずだ。

私が立ち上がろうとすると、横で椅子が激しく音を立てた。

遥子が、凄い勢いで奴のところに向かっている。

おいおい……どうするつもりだよ……

そして、その一撃は放たれた。

奴は壁に向かって、一直線に吹っ飛んでいる。

大丈夫だろうか？

お？ 生きているようだ。直撃の割に、意外にすぐ立ち上がったな

……

「何するんでやすか！」

そりゃ怒るわな……

しかし、それを遥かに凌ぐ勢いで遥子が叫んだ。

「全然違うわよ！ ほざいてるんじゃないわよ！」

奴が、うろたえている。だが、負けてはいないようだ。

「そう言う姉さんは、行っただんですかい？」

その時、遥子の手の平に光が見えた。

おいおい、実践かよ……ここじゃヤバいつて……

私はすぐに駆け寄ると、遥子の前へと出た。

「私と一緒に、攻略してきたぞ？」

「ま……まさか……だって、あそこは勇者でなければ攻略なんて出来ないはずでやす」

自分でバラして、どうするよ……

「だが、良く知っているな。それを、どこで知った？」

「それは、企業秘密でやすよ」

ニヤける奴が何かムカついたので、思わず襟を強引に掴んで締め上げた。

「わかりやした！ わかりやしたつて……旦那……離してください……」

私が手を離すと、咳き込みながら言った。

「たまたま、見つけたんでやすよ……古文書を……」

「何処でだ？」

「チヨイワル族のお城でやす。いっぱいあったので一冊くらい大丈

夫かなと……」

「いっぱい？」

「ええ、そりやもう同じような内容の本が何百冊もありやした」

やはりチヨイワル族は、魔の大陸に一枚噛んでるのか……

私は、人差し指を立てた。

「もう一つ聞くが、魔の大陸へ行ける方法は知らないか？」

「知りやせん……」

私達が見下ろすように冷ややかな視線を投げると、身を引いて目を丸くしながら言った。

「本当に、知らないんでやす！　嘘じゃありません、信じてください！」

とりあえず、奴を放置してマスターや他の客にも聞いてみたが、全く情報は無かった。

「仕方ない、他を当たるか……」

会計を済ませて酒場を出ると、奴が走ってきて私達の前に立ち塞がった。

「なんだ？　まだやるのか？　今度は遠慮しないぞ？」

「いえ！　違うんでやす！」

慌てて両手をふると、いきなり土下座をした。

「ぜひ、あつしを仲間にしてくだせい！　絶対に決して損はさせやせん！」

「無理だな……」

即答すると、これ以上ないほど悲しそうに顔を上げた。

「何故でやすか？」

私は、軽く溜め息をつく。

「お前、弱いだろ。普通に死ぬぞ？」

「そんな、殺生なあ……」

嘆いているが、どうにもならない。それが奴の為だ。

私達は、無視するように歩き始めた。

遠ざかる私達に、奴は叫んだ。

「絶対に、諦めやせんからね！」

第二十二節 情報だよね…… その2

もう夜も更けているので、宿を見つけてすぐにチェックインした。部屋は二つ、私以外は全て女性なので、大きい部屋を一緒に使ってもらっている。

男性は、シングル部屋に一人だ。

テレビなどはこの世界には存在しないのだが、別に見る必要も無い。静かな夜も、また乙な物だ。

これも、美の一つである。

だが、のんびりして居られるのも今のうち。

魔の大陸には、宿があるかどうかとも判らないのだ。

だが、時間をかけても居られない。

何とかして、策を見つけないければ……

次の日……

今日は私一人で、情報を求めて街を歩いている。

女性陣は、買物だそう。

それで一日が潰れたらたまった物ではないので、早々に逃げ出してきた。

しかし、これと言った情報はそうそう落ちていないものだ。さて、どうしたもんだか……

考えながら歩いていると、何かが目の前に立ち塞がった。

おもわず、剣に手を添える。

「っってお前かよ……いいかげんにしないと本当に斬るぞ？」

昨日の奴は、私の言葉に激しく首を振る。

「違っんでやす！ 今日^{今日}は情報を持つて来たでやす、旦那！」
「情報だと？」

激しく冷たい視線を投げかけると、奴は話し始めた。
「あつしが調べた所によりやすと、国際的な情報組織があるらしいんでやす」

また、怪しい話だな……

奴が周囲を警戒するように見渡すと、小声で言った。

「その国際組織の名は、盗聴全力^{盗聴}つていいやす」
激しく胡散臭いぞ……

「本当なのか？ それ……」

私が疑っていると、話を続けてきた。

「その組織のメンバーが、今夜この街に現れやす。」
ほう……ならば、会ってみるのも一興か……

「それで、コンタクトは取れるのか？」

私が問うと、答えに詰まる。

「いや……それは……」

ダメじゃん……

「でも！ 大丈夫でやす！」

何を根拠に……

「そのメンバーは、尾木間沙耶^{オキマ・サヤ}つて女性でやす。

特徴も聞いてきやした。旦那なら、きっと大丈夫でやす！」

おいおい……当たって砕けろつてか……

何という安易な……

しかし、このまま当ても無く街を徘徊していても、無駄骨に終わる可能性は高い。

組織と言うのも相当に危ないような気がするが、この際仕方ないか

……

だが、そんな人間が簡単に口を割るだろうか？

何かしら、ネタは仕込んで行かなければなるまい……

それがダメなら、後はどこまでハツタリが通用するか……

「では、行ってみようか。案内できるか？」

奴の表情が明るくなった。

「あつしに、任せてくださいやし！」

一緒に歩き出して、一つ質問してみた。

「ところでお前、名前は何と言う？」

「え？ まさか、知らなかったでやすか？」

「ああ、聞いて無いしな……」

奴は、激しく悲しそうな顔をした。

「そう言うお前こそ、どうなんだよ……」

「あつしは……あ……」

「だろ？ 勝手に、旦那とか呼びやがって……」

「面目ないでやす……」

軽く自己紹介を終えると、散歩気分で私の宿に向かっている。

奴の名は、古茂野出安コモノデ・ヤス

チヨイワルとヨウジヨのクオーターだそうだ。

容姿の方は、悪餓鬼と言うのがシツクリ来る小柄な奴である。

さつきから隣で色々と自慢気に話しているが、どれも大した話ではない。

話を総合すると、こそ泥と言う表現が一番適しているかもしれない

……

まあ、大きな犯罪に手を染めていないだけマシか……

宿に戻った私は、冷たい視線を注がれていた。

「なんで、勝手にそういう事を決める訳？」

遥子は、私の独断が気に入らないらしい……

世の中、説得するだけ無駄な事もある。

「まあ、早い話が他にネタが無かったのだよ」

「それが、嫌だつて言ってるのよ！」

軽く受け流すのも、気に入らないらしい。

「では、聞こうじゃないか。君達は、他に何か有益な情報でも仕入れてきたのかね？」

その言葉に、プイツと目をそらす。

困った物だ……これでは、埒があきそうに無い。

「まあ結論から言えば、安を見張りにつけて私一人で会う予定だよ」
皆が、驚いた顔で私を見た。

「何、勝手に危ない事しようとしてる訳？」

「いや、そろそろ行つてもしょうがないだろ……まあ、危なくなりそうなら逃げてくるさ」

それに、複雑な表情を浮かべた。

「で？ そいつ、仲間にする訳？」

遥子の問いに、安の表情が明るくなる。

「いや、それは無理だ」

「何ででやすかー！」

「だから言つたろ？ 安は普通に死ぬだろうから無理！」

「大丈夫でやすー！」

いったい、何を根拠に……

「あつしは、逃げ足だけは自信があるんでやす。絶対に死にやせん！」

それも、困った物だが……

「損は、させやせん！ どうか、お仲間……」

恒例の、土下座が来た……

参ったな……

大きく溜め息をついてから話し始めた。

「付いてくるのは勝手だが……悪いが、戦闘メンバーとしては勘定
できん。

下手に同行して足手纏いになって欲しくもない。

危険が伴いそうな場合は、別行動が絶対条件だ。

それに、その逃げ足を生かすとしても、敵陣の偵察程度しか頼めないぞ?」

「それで構いやせん! 嬉しいでやす! ありがとうでやす……」
安は、その場で号泣してしまった。

かなり、条件は悪い気がするのだが……

まあ忍者が一人出来たと思えば、そう悪くも無いだろう……

第二十三節 情報だよね…… その3

私と安は、港の倉庫前に来ている。

いやゆる、埠頭と言った雰囲気のところだ。

「ここだな？」

私が問うと、

「そうでやす」

後に続くように答えた。

さて、どうしたもんだか……

まずは、倉庫の陰に隠れてみる。

辺りは暗く月明かりに頼るしかないが、

ここならばどちらから来ても見つけられるだろう。

そして、安に言った。

「お前は、後で隠れて居ろ。いいな？」

それに、黙って頷いた。

遠くから、甲高い靴音が響いてきた。

やがて姿が見えてくると、何とも場違いな雰囲気の女性が歩いてくる。

闇に紛れているのでシルエツトでしか確認でないが、

まあ、これは間違いないな……

目の前を横切ろうとする時、私は一歩だけ歩み寄って声をかけた。

「尾木間沙耶だな？」

声と同時に、その歩みが止まった。

月明かりに照らされると、その全容が判った。

顔が半分ほど隠れる大きな赤いハット、

そして赤いロングコートに流れる金色の長い髪が妙に目立つ。

やはり場違いな雰囲気ではあるが、かなりの美形である事は十分に伺わせていた。

こちらに振り向かず立ち止まっているが、これはかなりヤバイ雰囲気だ。

殺気こそ消しているが、そこに一切の隙は無い。

十中八九、手練だ……

「情報が欲しい、協力してくれないか？」

女性は、まだ黙っている。

「命が欲しい訳ではない。出来れば、穏便に済ませたいのだが？」

それに、僅かな笑みを浮かべた。

「こんな所で交渉なんて、ムードが無いのね……」

静かな声だ……

私は、それに続けた。

「そうだな……君も忙しいだろう。日を改めても構わない」

「それじゃ明日のこの時間、タカイヨホテルのラウンジで」

それだけ告げると、また靴音を響かせて歩いて行った。

沙耶が見えなくなると、大きく息をついた。

もう、たまらんわ……緊張した……

気が付けば、私は汗だくになっていた。

その時、後から安が声をかけてきた。

「あれで、良かったんでやすか？」

「ああ……もし噂通りのプロなら、明日までに私達の情報は掴んで来るだろう。」

だが、逆に何を知りたいかも判るはず。

まあ次会う時には丸裸状態ってのは気に食わないが、この状況では仕方ない。

そのくらい譲歩しなければ、交渉に乗っては来ないだろうよ」

「そうでやすか……」

何処か、納得が行かない表情で頷いた。

ひとまず、今日の所は出来る事が無い。私達は、そのまま引き上げ

だ。

そして翌日……

私と安は、指定の時間よりも前にタカイヨホテルの前に来た。全体を見渡すと、超高級ホテルなオーラが出ている。

さてと……

「安は、外から見ていてくれ。だが、奴等がどれだけの人数で来るかは不明だ。

私よりも自分の背後を気にしてないと、あっさり捕まるぞ？

じゃ行ってくる。最悪の場合は、全力で逃げろよ」

安は、それに頷いた。

今、ラウンジに座っている。

剣が邪魔になるので、壁寄りの長椅子は避けて真ん中の寄りの席に腰を掛けた。

高そうな革を張った、肘掛の無い小さな椅子だ。

注文を聞きに来たので、

「ホット」と言ってみると、コーヒーのような物が出てきた。適当に頼んではみたものの、素直に出てくると思わなかった。

こう言うの、あるんだ……

一口飲んでみると、確かにコーヒーのような……

いや、お茶のような……

かなり、微妙な飲み物である。

伝票を持ってきたので覗いてみると、
なぬっ！

おもわず、目が飛び出た。

5800エンってなんだよ！　いくら何でも、高過ぎだろ！

だが、まあ今は仕方が無い。

味わって、飲むか……

腕を組んで、待ってみる……と言っても、そう見せているだけで、右手は剣に手を掛けたままだ。

その時、背後から声が聞こえた。

「早いね、待った？」

声こそ明るいが、私の出方いかんによっては殺す事も容易なはずだ。

私は、その体制のまま言った。

「まあ、どうぞ座って。ホットで良いかな？」

その言葉に頷きながら、私の正面に座った。

危なかった……

横目に、何かを仕舞う瞬間を見てしまった……

だが、ここで怯んではいられない。

沙耶に聞いてみた。

「さて、どこまで搦んだのかな？」

それに、笑顔を見せる。

「ずいぶんと、おりこうさんね」

それに、私も笑顔で返した。

いや、マジで緊張するんですけど……

その時、沙耶が切り出した。

「判っていると思うけど、お互い信用するにはまだ早いわ」

それに素直に頷くと、話を続けた。

「まずは、実力を見たい。仕事を頼まれてくれないかしら？」

テストか……まあ仕方ない。

軽く溜め息をついてから、一度だけ頷いた。

「それじゃ、こちらから連絡するわ。」

沙耶は軽やかに立ち上がると、そのまま去って行った。

私は、大きく息を吐きながらその場に頂垂れた。

やっぱ、たまらんわ……

私が椅子でグッタリしていると、もう一つのホットが運ばれてきた。

テーブルに虚しく置かれると、追加伝票が静かに増えた。

二杯のホットをしつかり最後まで飲み干すと、

私は会計で狂ったような金額を支払って外に出た。

第二十四節 何が来るやら……

私達が帰ると、遥子が仁王像のように待ち構えていた。

「それで？ どうなった訳？」

「こりゃ、参ったな……」

やはり、私の独断が気に入らないらしい……

「大体ね、アンタはいつも勝手過ぎるのよ！」

「そう言われても、困るのだが……」

「そもそも、良く判らない依頼なんて受けないでしょう。普通！」

まあ確かに、普通はそうだが……

「もう、知らない！」

何やら、怒って部屋に戻ってしまった。

三人組は、私に気を使いながらも、おずおずと遥子に付いて行く。

すでに女王様だな、あれは……

「何か言った？」

突然に開いたドアから遥子が覗いている。

「いや……何も……」

私が言い終わる間もなく、強くドアが閉められた。

何だよ……まさか読心術とか使ってるんじゃないかあるまいな……

だが遥子も、すでに手詰まりである事は感じているはずだ。

しばらくは、私の好き勝手にやらせてもらっさ……

朝から、私のシングル部屋に皆が集まっていた。

「あの……ずいぶんと、狭いんですが……」

私の言葉に、遥子はただ睨みつけるだけだ。

会話が成り立たない……

困った物だ……

その時、誰かがドアをノックした。

私が出ると、そこに尾木間沙耶が居た。

「ずいぶんと、早いね……」

その言葉に、沙耶は軽く微笑む。

「中で話して、良いかしら？」

どうぞとばかりに、手の平を部屋に向けて招き入れた。

一通り自己紹介を済ませると、沙耶が話し始めた。

「さっそくなんだけど、やって欲しい仕事があるわ」

それに頷くと、続けた。

「軍の侵攻を、止めて欲しいの」

はい？

一瞬、意味が判らなかった。

「軍だと？」

その問いに、当然のような表情で沙耶は頷いた。

今回の仕事、それはサイバ工連邦共和国へ攻め込もうとしている、
軍隊の進行を阻止する事だ。

オジ三国より、北に広がる果てしない大地。

それが、平和主義で中立国のサイバ工連邦共和国だ。

膨大な田畑と畜産は、ダメーダバグと言う管理システムによって
綺麗に区画整理されている。

国の人々は、地区ごとに分かれて

バグライフと呼ばれる人海戦術で効率よく収穫し、世界各国へ食を
供給している。

その食料供給システムの完成度は高く、

規模は世界の消費量に対して実に8割以上と言われているそう。

何故に、そんな無謀な事が出来るかと言えば、秘密は魔法にある。魔法による保存は、冷凍保存など比較にならない完成度だ。何しろ、時間ごと止めてしまうのだから……

これの元になった魔法は、ジカントと言う魔法だ。

確か、遙子もコジウ塔で覚えたはずである。

誰が名付けたのかは知らない……

本来この魔法は戦の中で使われていて、効果があるのは数分程度。それを完成度の高い保存魔法にする為に、サイバ工連邦が国を挙げて研究に取り組んだそう。

各国に運ばれて行くジカント・メルハコと呼ばれる段ボールのような箱は、

私達にしてみれば夢の箱だ。

そして開封と同時に魔法が解けるようになっていて、盗作防止にもなっているそう。

細かい所も、妙に凝っている……

まあ、使いようによっては危険な代物でもあるので、管理は徹底して当然である。

どうやら人間でも使えると言う噂はあるそうだが、実験した人は居ないと言う。

確かに、片道切符のタイムスリップは御免こうむりたい。

ところで、そんな一箇所で作って自然災害が起きないのかと心配になったが、あまりに広大な土地ゆえに例え数箇所の機能が止まっても他で補えると言う。

これまで大きな問題は起きていないそう。

話によれば、オバ帝国よりも力を付けたいオジ三国は、サイバエを狙っていると言う。

それに対して必死に反対しているのがマスオ族だが、なかなか意見が通らないそうだ。

もし、そこが攻め込まれ占領されれば、世界の食糧供給が止まってしまう。

だが、例外がある。それは魔の大陸だ。

あそこだけは、他の国と何も共有していない。

国同士の交流が、一切無いのだ。それはそれで、大した物である。だがサイバエを手中に出来れば、ある意味世界を支配したも同然だ。それを、阻止しようとしているのも理解できる。

だが、しかし……

「あのさ……さすがに、軍隊相手は無理じゃね？」

私の言葉に沙耶は、

「まさか、真っ向から立ち向かえなどとは言わないわ」と笑顔を見せた。

もう一度、私は問いかけてみる。

「では、私達にどうしろと？」

「どんな手段でも構わないわ。でも5日間、確実に足止めをして欲しいの」

その言葉に、私は腕を組んで悩んだ。

手段を選ばずと言っても、相手は軍。

たった6人で、何が出来ると言うのか？

あまりにも、不利な状況だ。

私は、さらに聞いてみた。

「ところでサイバエ国は、軍隊を持っていないのか？ 本来これは、

軍の仕事だろ？」

それに、沙耶の表情が曇った。

「確かに、あるには……あるんだけど……」

どうも、はっきりしない言い方だ。

「何か、問題でも？」

その質問に、沙耶は溜め息をついた。

「そう……あの戦争を、知らないの……」

「戦争？」

私が首を傾げていると、呟くように言った。

「そうね、貴方達には最初から説明した方が良さそうだわ」

平和主義で中立国のサイバ工は、例えば攻め込まれたとしても滅多に反撃に出ない。

だが、本気になれば強いそうだ。

しかし、その時は世界規模の戦争を覚悟するべきだと言う。

以前に、オバ帝国との戦争が起きたらしい。

それは各国を巻き込み、世界大戦になった。

その大戦に、魔の大陸も参戦していたそうだ。

当時までは、そこは魔の大陸と呼ばれていなかったと言う。

他の国との交流も深く、明るい国だったらしい。

その名前は、イチマルキュ国と言ったそうだ。

それが、あの戦争の終盤で激変した。

ある日、魔弾頭と呼ばれる大量破壊兵器が大陸に打ち込まれた。

その威力は小さい島など軽く吹き飛ばすと言うので、

私達の感覚で言えば、核を積んだ大陸間弾道ミサイルに近い物なのかもしれない。

それから、イチマルキュ国は丸1年の間沈黙した。
突然に、全く連絡が取れなくなったそうだ。

それは、国家間はもちろん個人にも及んだ。
誰とも連絡が取れなくなってしまったのだ。
各国は幾度も偵察を出したが、戻って来た者は誰一人として居ない。
やがて、どの国も搜索を諦めてしまつと、誰も近寄らない大陸になつてしまつた。

そして、大陸の情報が1つ届く。

それが、魔物の目撃だつた。

最初は、大陸近くを通過した船からの情報だつたそう。

それから、徐々に魔物の目撃例が増えて行つた。

それが拡大して行くと、他の国でも目撃されるようになる。

その1つが、オジ三国である。

そして、今に至るそうだ……

さすがに人間が滅んだ訳ではないと思うが、かなり不気味である。

そんな訳で、他の国はサイバ工連邦に手を出すような事はしない。

静かに、友好国として付き合っているそう。

だとしたら、どれだけオジ三国は切羽詰っているのだろうか？

どうも、腑に落ちない。

それとも、すでに魔物が潜んでいる事が影響しているのだろうか？

人間に化けた魔物が特に多いのは、このチヨイワル族の地域だ。

そしてこの軍隊を仕切っているのは、キギヨウ戦士族では無くチヨイワル族。

そうだとすると、魔の大陸の戦略とも十分に考えられる。

かえって、そう考えた方が自然な気がするのだが……

だが、いずれにしても、この進行は阻止するべきなのだろう。

しばし、無言の空気が流れてから問いかけてみた。

「依頼主は、オバ帝国か？」

沙耶が、不敵に笑みを浮かべた。

「そんな事、言えるわけ無いでしょう？」

なるほどね……まあ、中らずと雖も遠からずって訳か。

まず、早急に欲しい物がある。

「サイバエまでの地図はあるか？　なるべく詳しく載っている地図が欲しい」

それに一つ頷いて、沙耶が続ける。

「それは、すぐに用意するわ。それと、私の部下を二人出そうと思う。」

いくらでも、使ってやってね」

それで8人か……

まあ、いずれにしても真つ向勝負は無理だろうな……

その時、沙耶が立ち上がった。

「そろそろ、時間のようね。こちらに、二人を向かわせるわ。後は宜しく」

「待つて！」

突然に、遥子が声を上げて立ち上がった。

このタイミングで、何をしようと？

私が心配になって見ていると、

「それで、報酬は？」

金かい……

まあ、確かに必要ではあるが……

沙耶はおもむろに振り返ると、人差し指を立てた。

「1億で、どうかしら？」

第二十五節 作戦ってか？

さつきから、なんだ？ この女性陣の笑顔は……
まさか、もう貰った気で居るんじゃないだろうな？
きつと、これの事を言うのだろう……現金な奴等だと……

しかし、ホイと1億とは……
確かに危険な仕事には違いないが、いくら何でも出し過ぎだろう。
いったい、どれだけ相手さんからボツタ食っているやら……

その時、ドアがノックされた。
私が出ると、二人の女性が立っている。

金髪のロングに青い瞳。動きやすそうな余裕のある服にも関わらず
スツとした井出達は、まるで外人モデルのようだ。

「どちらさん？」

二人は黙ったまま、丸めた長い紙を渡してきた。

それを慎重に受け取ると、おもむろに開いてみる。

地図だ……

もう用意したのかよ……

「すると、お仲間ね？」

その問いに、無愛想に頷いた。

何やら、いきなり嫌われているようだ……

「まあ、入って」

手の平を部屋に向けると、無表情のまま入ってきた。

ひとまず座るが、妙に気まずい。

非常に困った……

「とりあえず、自己紹介をしたいんだけど、いいかな？」
返事が無い……

うゝん……厄介な奴等だ……

私が一通り仲間の紹介を終えると、
ようやく二人が口を開いた。

「ダッツ……」

「ナーヴェ……」

……

それだけかいつ……

私は、地図を見ながら悩んでいた。
多分、仕掛けるならここしかない……
しかし、これは正規ルートではない。
沙耶に聞いた所によれば、この部隊は二つに分かれて行動している
という。

そして、その両方を足止め出来なければ何の意味も無い。
ここに足止めするには一箇所に纏めるか、もしくは片割れを葬り去
るか……

なかなか、一筋縄に行きそうに無い……

突然に、遥子が声をかけてきた。

「ねえ？ 大丈夫？」

ふと視線を上げると、皆が注目している。

「ん？ どうした？」

それに、遥子は大きく息をついた。

「さつきから、ずっと下を見たままよ！ 心配するじゃない！」

そうか……私は、固まっていたか……

「いや、すまん。なかなか難しくてな……」

皆、安心したように溜め息をついた。

私は、ふと聞いてみる。

「火薬つて、どこで手に入れるんだ？」

皆、それに不思議そうな顔で首を傾げる。

「おや？ 何故、わからない？」

「凄い威力で、ドン！ と爆発する黒い粉なんだけど……その二人は知ってるよね？」

それに、ダツツとナーヴェは知らないとはかりに首を傾げている。
あれ？ どうして？

その時、翔子が言った。

「もしかして、こう……ドン！ となる奴ですか？」

「そうそう、それだよ」

人差し指を立てて頷くと、翔子は続けた。

「それは、魔法玉の事ですね？」

ん？ いや、ちよつと違うと思うのだが……

「魔法玉って何？」

私の質問に、目を丸くした。

「港に着いた時、盛大に鳴っていたのですが、気付きましたでした？」

あれは、花火じゃないのか……

「もつと、こう大規模に爆発する物が欲しいんだけど、トンネル工事とかで固い岩盤に穴開ける時つて、どうしてるの？」

「そんな時は、魔法で破壊してますね」

なるほど……この世界には、火薬つて物が無いのか……

「で、その魔法玉は、どこに売ってるの？」

今、皆を乗せて馬車を走らせている。まずは、現地の偵察だ。
ひとまず、ルートの分れ道まで来た。

道は二股になっていて、右が正規のルートだ。

左は旧道で、結局は先で同じ道になるのだが、勾配が大きいので今のルートが作られたそうだ。

私は左に向かって馬車を走らせ、目的の場所に到着した。そこには、大きな橋が架かっている。

私は、状態を確認に行った。

レンガのアーチ橋だ。

思ったより立派である。

横から覗くと6つのアーチになった、かなり長い橋だ。

周りを見渡すと右の上方に、正規ルートらしき道が見えた。

良く見ると、一台の馬車が止まっている。

あれは何だ？

ダッツに聞いてみた。

「あの馬車は、何だか判るかい？」

それに無表情で答えた。

「軍の、偵察隊……」

ほう……

続いて、遙子と翔子に聞いてみた。

「あの馬車の辺りから、魔法を打ち込めるか？」

二人は、それに頷いた。

ほう……ならば、いけそうだな……

「皆、戦闘準備だ！」

今、軍を先導しているのは私だ。

先ほど縛り上げた、偵察隊の鎧を借りて本隊に合流している。

こう言う時は、顔の隠れる甲冑の兜はとても便利である。

遙か後方で、爆発音が聞こえた。向こうも、始まったようだ……

「今のは何だ？ 敵の攻撃か？」

ただの、魔法玉なんですがね……

うろたえる隊員達に、隊長が指示を出す。

「急げ、この為の別行動だ」

二股の道まで来ると前方から一人、甲冑姿の兵士が息を切らせて走ってきた。

「大変です！ この先で、敵が待ち伏せています！」

「何？ 隊長っ！ 回避しましょう！」

私が大袈裟に叫ぶと、隊長は素直に頷いた。

「では、後方部隊にも知らせてくれ！」

ビツと敬礼を交わしてから、左のルートに向かって馬車を走らせた。まさか、今のが伊代だとは思っていないようだ……

見張りの片割れは背が小さかったのでこの人選になったのだが、必至に走ってくる姿は、かえってナイスだったかもしれない。

しばらくすると、後方部隊が凄い勢いで馬車を走らせてきた。

そして、部隊からの報告が上がる。

「大変です！ 後方から敵に攻め込まれています！」

隊長は、それに頷いた。

「なんと、挟み撃ちにする気であつたか！ では、こちらは敵の後を取るぞ。急げ」

私は、馬車のペースを少し上げて走らせた。

安たちが、上手く後方部隊を誘導してくれたようだ……

やがて、橋が見えてきた。

速度を落とすことなく、その橋を渡っていく。

真ん中を少し過ぎた辺りで、後方から爆音がした。

「何だと？ 敵の攻撃だ！ 戦闘準備！」

その時、私は手綱で一氣に馬をあおった。

私の馬車が急加速していく

「何？ 我等も追うぞ！ 行け〜！」

隊長は驚いて、私の後を追いかけてくる。

だが、その差は信じられない勢いで開いていった。

「さすが、おやっさんと大さんのお勧めだ！ このままブツ切るぜ！」

やがて、軍を遙かに引き離れた私が橋を渡りきると、また後で爆音が響いた。

私は軍を取り残し、そのままの勢いで前方へ走り去った。

その先から正規ルートに回り込んで遥子と翔子を向かえに行くと、奴等はようやく騙された事に気付いたようだ。

橋までは遠くて人間が豆のようにしか見えないが、怒り狂っているのが良く判る。

しかし橋の前後は見事に破壊され、もはや軍隊は動きようが無い。

問題は、魔法で撃ち抜いた橋の先だ。

木が吹っ飛ぶどころか、巨大なクレーターが二つ生まれている……

さすが、この二人の魔法は半端ではないな……

こちらに向かって、弓矢が飛んで来ているようだが、さすがにここまでは届かない。

ん？

橋に光が見えた。それは物凄い勢いで、こちらに向かって突進してくる。

「やっべ……」

私が回避行動を取ろうとしたその時、耳元で大きな声が響いた。

「破〜！」

遥子から放たれた白い光は敵のそれをアッサリ粉碎し、尚も威力を落とさずに橋へと突き進んで行く。

終わったな……

辺りに爆音が響き渡ると、その魔道師が居た付近の橋の表面ごとえぐられたように消滅していた。

そして橋の向こうには、新たなクレーターがまた一つ生まれていた。

ああ……可哀想に……

私は、橋に向かって合掌を捧げた……

黙祷を終えた私は、そのまま悠々と馬車を進ませて待たせてある仲間の所へ向かった。

これで、最低でも数週間は軍を足止めできたはずだ……

下手すれば、月単位で帰れないかもしれない……

それまで、橋が崩壊しなければ良いが……

街まで戻って来ると、ダッツとナーヴェを先に降ろした。

「今日は、ありがとう。君達が魔法玉の扱いを熟知していたお陰で、本当に助かったよ」

私の言葉に、首を振って話し始めた。

「いえ、こちらこそ失礼な態度で申し訳ございません」

お？ 初めてまともに話したぞ？

「貴方が、どんな人物か判らなかつたので……」

何だか恐縮しているので、私から話しかけた。

「いや、君達は何も間違っていない。忘れてくれ」

それ続けて、二人は言った。

「貴方は、何者なのですか？」

「私か？ 私は何処にでも居る、美の探究者さ。それじゃ、後は宜しく頼むよ」

軽く手を上げると、二人は深く頭を下げた。

次の日の午後……

私達の目の前に、1億の現金が積んである。

女性陣と安は満面の笑みを浮かべているが、

私としては、その子供銀行のような紙幣に微妙な心境である。

沙耶が言った。

「それで、今回の作戦内容だけど、私の所に報告が上がっているわよ。」

まさか、あの二人がサポートに回るとはね……」

首を振りながら、微笑むと続けた。

「貴方達の実力を甘く見ていたわ。でも、どうやってあのルートに誘導したの？」

「ああ、それは簡単だよ。正規のルートに、敵の待ち伏せを匂わせただけさ」

私が軽く言うと、沙耶は大きく溜め息をついた。

「なるほどね……だけど、本当に助かったわ。ありがとう」

「それよりも、情報が欲しいのだが？」

少し眉を顰めて言うと、沙耶は頷いた。

「わかってる……でも今は、時期が悪すぎるの。もう少しだけ、待つて頂けないかしら？」

魔の大陸までは、必ず送り届けるわ」

沙耶に、頭を下げられてしまった。

このプロフェッショナルが言うのだ、間違いは無いだろっ。ならば、今は待つしかないか……

第二十六節 出なきゃダメ？

私達6人は、これと言ってやることも無く、狭いシングル部屋でダレテいるとノックの音が響いた。

おもむろにドアを開けてみると、そこに沙耶がいる。

「暇してる？」

誰のせいだよ……

すると、私をすり抜けて部屋に入って行った。

「ちよつと入るわよ」

もう、入ってるって……

沙耶は背中を見せたまま、指に挟んだ紙をヒラヒラとさせた。

「これに、出てみない？」

それを受け取って、読んでみる。

「何々？ 第15回史上最強決定戦……優勝賞金3000万？」

何だ？ 武道会みたいなものか？

だが、沙耶にしてみれば大した金額じゃ無いよな……

私が首を傾げていると、沙耶が振り向きざまに紙の上に人差し指を向ける。

「問題は、その下よ」

そこには、小さく副賞が書いてあった。

「ニヤーの鏡？ なんだそれ？」

その時、翔子が思いだしたように言った。

「あ……それって、あの神話の？」

「神話って？」

私が聞くと、続けて言った。

「はい、それは……その目を見ただけで、

たちどころに石に変えてしまおうと言う、魔物へビアタマにまつわる神話です。」

へビアタマって……

「それによれば……神より遣わされた神官センは、魔物の巣窟へ勇敢に立ち向かった。

その道程は困難を極めたが、ついにニヤーの鏡でその魔力を反射させへビアタマを石に変えた……と記されています」
それって……

僅かな沈黙の中に、静かな声が響いた。

「でも、それは真実じゃないのよ」

そう切り出したのは、沙耶だった。

「ん？　どうということだ？」

私が問うてみると、腕を組んで少し怒りながら言った。

「何者かの策略によって、その話が刷り換えられているのよ……」

その言葉に、少し引かかったので聞いてみる。

「どうして、そんな話を知っているのだ？」

沙耶は、睨むように私を見た。

「それは、我が尾木間家に代々伝わっている話だからよ」

ほう……

「その神官は、私の遠い先祖にあたるの。

真実はこうよ……人間の姿に化けて、国王を亡き者にした魔物へビアタマは、

己を国王の姿に変える幻術で民を惑わし、国を滅亡へと導いていた。

その異変にいち早く気付いた神官の尾木間泉は、

女神ネコミミの力を借りる為に、北の最果てにあるというニャンコ神殿へと向かった」

猫かい……

「女神ネコミミの祝福により、聖猫マツシグラの魂が宿りしニヤーの鏡をへビアタマに向けると、

その幻術を打ち破り勝利を収めた……と言つのが真実なのよ」
何だか、色々入り交ざってるな……

だが、ちょっと待てよ……

「なら、どうして家宝として物が伝わって無いんだい？」

それに沙耶は、大きく溜め息をついた。

「鏡そのものは、ニャンコ神殿を模して作られた
ニャンコツー神殿に収められていたんだけど……」
ツーって……

「それが、10年前に何者かに盗まれたのよ」

ほう……なるほど。

だが、もう一つ気になる。

「それで、これって本物なのか？」

私が紙に指を向けると、

「それは、私達にも判りかねるわ。真意を探るうにも、嚴重に管理
されていて

手に入れるには優勝するしかないのよ。だから、優勝してね？」

また、軽く言うなあ……

しかし、もしこれが本物なら、街に紛れている魔物を選別する事は
可能になるだろう。

確かに、有益な品だ。

だが、なあ……

私は、また質問を投げかける

「これって、人間相手に戦うんだろ？」

「ええ、でも死ぬ事は滅多に無いわよ」

たまに、死ぬんだ……

しかし、これは困った……

遥子達に視線を向けながら、沙耶に言った。

「何しろ私達は、見ての通り女性ばかりのメンバー構成だ。

とても、こんな野蛮な競技に出場する気にはなってくれぬ訳……
いや、訂正させて頂く……」
そこには、女性達の怪しい笑顔と黒いオーラが漂っていた。

第二十七節 ヨウジヨ・ジャパン現る

私達は闘技場前に来ている。

形としては……やはり妙に記憶にあるな……

さて、やる気満々な女性陣が放つ無言の圧力によって

出場する事になってしまった私達だが、

まずは、先に登録をしなければいけない。

とりあえず白い合羽のような物を羽織った係員らしき人物に、紙を見せながら話を聞いてみる。

「あの……これの受付ってどこでしょうか？」

「はい。受付は、あちらの奥になります。

左に看板がございますので、それを目印にしてください。

それと現在、格闘保険のキャンペーン中です！

ご案内させて頂いて、宜しいですか？」

格闘保険？

何だそれ？

私が首を傾げていると、合羽の女性は勝手に喋り始めた。

「戦いは、これからだ！ もし怪我をされた時の保障は入院日額7000円！

戦う前から医療保険！ 手術入院費用は一生涯！

死亡時最大1000万が、今なら月額2000エン！ これ決め手かな？

そして、なんと業界売り上げナンバーワン！

今なら可愛い、お父さん猫のヌイグルミが付いてきます！ 回れ猫ダンス♪」

なんと、無茶なキャッチコピーを……

「まず受付をしなきゃいけないので、考えておきます」

「はい！ お待ちしております！」

軽い会釈をしながら、そのまま受付に向かった。

歩いて行くと、上に

「最強戦受付」と書いてある。

微妙な略だが、多分ここだろう……

奥のテーブルに座る女性に、声を掛けてみた。

「すみません、出場したいんですが？」

それに、女性は明るく答えた。

「はい！ それでは、こちらに記入してください。」

1枚の紙を、テーブルの上にヒラッと置いた。

何々？

代表者氏名と……出場人数と……

団体名もあるのかよ……

ん？ 出身国？

とりあえず、遥子に聞いてみた。

「なあ、出身国だってよ……どうする？」

それに、首を傾げている。

困ったな……

「あの……この出身国って、書かなきゃダメですか？」

「はい！ 決まりですので！」

さっぱりと言われてしまった。

私は、皆に訪ねてみる。

「で？ これ、誰が書くの？」

それに全員が無言で、私に人差し指を向けた。

あれ？

なんで、そうなっちゃうのかな？

どうやら、いつも面倒な時だけリーダー扱いされているような気がするんだが……

まあ、仕方ない……

ひとまず、自分の名前は良いとしてと……

さて、団体名と出身国で困った。

まあ、団体名は置いといてと……

まずは、出身国が問題だ。

ここで日本と書いても、誰も判らないだろう……

国名に漢字は使われていないようなので、ここはジャパンか？
いや……それでも、判らないに決まっている。

しかし、ヨウジヨと書くのは心から気がひけた。

「なあ？ 何て書くよ……」

私の問いに、答える者は居ない……

仕方なく、2つを続けて記入してみた。

ん？

ヨウジヨとジャパン？

そうか！

これは強大な敵が待ち受けるであろう魔の大陸へ向かい、
勝利を目指すチーム名としても上等ではないか！

「決まったぞ！」

振り返り様に、拳を握り締めて言う私に、遥子は冷たい視線を投げかける。

「何がよ……」

私はその拳に、更なる力を込めた。

「これより我々は、ヨウジヨ・ジャパンだ！」

第二十八節 くじ引きね……

「それでは、次に出場番号を抽選いたしますので、どうぞあちらへ」
案内係りの人に誘導されるままに、私達はそちらへ向かった。

すいぶん、並んでいるな……

こいつ等、全員出るのか？

そこには、色々な種族の人々が長い行列を成している。

どうやら、人気があるイベントらしいな……

係員に聞いてみると、色々と教えてくれた。

この人気は、優勝賞金が高いこともあるがそれだけでは無い。
大会はトーナメント方式で勝ち上がって行くのだが、

勝つ度に現金が手に入るそうだ。

1回勝てば10万、2回勝つと50万と金額が上がっていく。

そして例え3回戦目で勝てそうに無い相手に当たって棄権しても、
それまで勝った金額は手に入るのだ。

なので、小遣い稼ぎに出て来る者も多いそうだ。

しばらく並んでいると、

受付を終えて戻ってくる奴等のテンションに妙な落差がある。
なんだ？

私は、遥子に言った。

「ちよつと前を見てくるから、皆で待つてくれるか？」

それに頷いたので、私は列を離れて受付の方に歩いて行った。
すると、突然に叫び声が響いた。

「げっ！ 何で、Aブロックなんだよ！」

受付を終えたメンバーが、全員で頭を抱えて座り込んでいる。
何があっただんだ？

その時、少し後で並んでいたオッサンが呟いた。

「あちゃ〜、可哀想にな…… Aブロックだってよ……」
ん？

ブロックが違うと、何かあるのか？

私は、そのオッサンに聞いてみた。

「Aブロックって、何か問題でも？」

それに驚いた顔を見ると、オッサンは話し始めた。

「あつたりめえよ！ あんな所に入れられたら、命が幾つあっても足りね〜さ！」

はい？

首を傾げていると、オッサンはさらに驚いて続けた。

「おめえ、知らねえのか！ もう3年も連続で優勝してる、化け物みてえに強えのが居るんだよ！」

ほう……それは、確かに当たりたくない相手だ。

ようやく、私達の順番が来た。

私がクジを引くと、A-2と書いてある。

その瞬間、周りの全てが凍りついたように沈黙した。

何だ？ 何か、やっちゃったか？

「あの……」

受付係が呟いた。

「優勝候補である、津世伊蔵^{ツヨ・イツウ}十字団との対戦が決定いたしました……」

……」

どうやら、やっちゃったようだ……

この中にある、最高のビッグカードを引いてしまったらしい……

その時、ふとビリーの言葉を思いだした。

これの、どこが神の加護だったか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9795y/>

ヨウジョ・ジャパン

2011年12月25日18時50分発行